（財） 大阪府文化財センター調査報告書　第199集

堺市

太井遺跡・余部日置荘遺跡

大阪府営水道中期整備事業「バイパス送水管布設工事」に伴う発掘調査

2010年3月

財団法人 大阪府文化財センター

（財） 大阪府文化財センター調査報告書　第199集

堺市

太井遺跡・余部日置荘遺跡

大阪府営水道中期整備事業「バイパス送水管布設工事」に伴う発掘調査

財団法人 大阪府文化財センター

1．太井遺跡　遠景

2．余部日置荘遺跡　遠景

序　　文

太井、余部・日置荘の地は、西除川のそれぞれ右岸、左岸にあたります。その源の狭山池が深くこれらの地のみならず周辺地域の歴史に大きく関係することは、論を俟たないことでしょう。そして、狭山池といえば、行基、重源の名がすぐに思い出されます。重源上人は、行基菩薩の遺跡として著名な、河内国狭山池や播磨国魚住泊を積極的に重修しています。そうすることで、重源上人が行基菩薩を尊び、追慕し、常に範としながら、土木工事を興し、人々の利生をはかっていく行基菩薩の姿に、行基菩薩再来の姿を自らに重ねたいとする想ひがあったに違いないように思えるのです。また、盧舎那佛鋳造にあたる宋人陳和卿を支援する共同鋳物師集団に、上人出生地と伝えられる桑原郷やこれに接する坂本郷からも近い、河内国丹比郡黒山郷有縁の草部是助以下が選ばれるのも、その職によるだけでなく、上人の和泉から丹比への照射に基づくものと想像されます。その黒山郷の郷域は、単に今日の上黒山、下黒山にとどまらず、太井や余部のあたりまで、即ち丹比郡が八上・丹北・丹南に分かれて後の、八上郡界に近い地域を含めた今日よりやや広い郷域を持っていたのではないかと考えています。

さて、太井遺跡、日置荘遺跡において行われた、府道松原泉大津線と近畿自動車道松原海南線の建設に先立つ発掘調査から、はや 20 年ほどの年月がたち、今回は久しぶりの両遺跡における当センターの調査となりました。過去の道路建設に先立つ調査当時は、周辺に田畠が多く残っていましたが、道路開通により景観も大きく変わりました。今回報告の両遺跡についても、調査前はその実態がほとんど知られていなかったものの、上に記した道路建設に先立つ調査以来、多くの大規模調査が行われており、実態が把握されつつあります。こと、河内鋳物師については、調査により得られた成果から、多くの研究もなされています。今回の調査は小規模なものでしたが、また新たな成果を得ることができました。

これもひとえに、多くの方々のご協力、ご配慮があってこそ、得られるものです。深く感謝申し上げるとともに、今後とも当センターへの事業に変わらぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成 22 年 3 月

財団法人　大阪府文化財センター

理事長　水　野　正　好

例　　言

1．本書は、大阪府堺市美原区に所在する太井遺跡 09 － 1 および、堺市東区に所在する余部日置荘遺跡 09 － 1 の発掘調査報告書である。

2．調査は、大阪府水道部南部水道事業所から財団法人　大阪府文化財センターが平成 21 年 7 月 1 日から平成 22 年 3 月 31 日の間委託を受け、平成 21 年 7 月 7 日から平成 21 年 9 月 30 日まで調査を行い、平成 21 年 10 月 1 日から平成 21 年 11 月 30 日まで遺物整理作業を行い、平成 22 年 3 月 31 日、本書刊行をもって完了した。

3．調査は以下の体制で実施した。

調査部長兼調査課長　福田英人、調整グループ長　金光正裕、南部総括主査　森屋美佐子、副主査　市村慎太郎

4．既往の調査成果については、調整グループ長　金光正裕、弥生文化博物館学芸課長　江浦　洋、調査グループ技師　鹿野　塁より教示を受けた。また、出土遺物のうち、鋳造関連遺物、石器については、調査グループ技師　新海正博より、土器、陶磁器については、調査グループ京阪総括主査　三好孝一より教示を受けた。

5．調査、整理の実施にあたっては、堺市教育委員会、美原西校区自治連合会、太井自治会、日置荘校区連合会、日置荘原寺町会、大阪府立農芸高等学校、大阪府教育委員会をはじめとし下記の方々に、ご指導、ご協力を賜った。記して感謝を表したい。（五十音順、敬称略）

小野信義（大阪府水道部南部水道事業所）、別所秀高（財団法人東大阪市施設利用サービス協会）、永野智子（同志社大学歴史資料館）、山上　弘（大阪府教育委員会）

6．本書の作成は、森屋の指導の下、市村が行った。

7．編集は市村が行った。

8．本調査に係わる写真・実測図などの記録類は、財団法人大阪府文化財センターにて保管している。

凡　　例

1．遺構実測図の基準高は、Ｔ．Ｐ．（東京湾平均海水位）を基準とし、プラス値を記している。なお、Ｔ．Ｐ．表記やプラス表記は省略する場合もある。また、使用単位はメートルを基本としている。
2．遺構平面図などに付す座標値はいずれも世界測地系によるもので、単位はメートルである。
3．遺構平面図に付す方位針は、座標北である。なお、真北は座標北から東へ０°　15′、磁北は座標北から西へ６°　59′西へ、それぞれ振る。
4．現地調査及び遺物整理は、財団法人大阪府文化財センターが 2003 年８月に定めた『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』に準拠して行った。遺物の取り上げに使用した地区割りのうち、第Ⅰ区画は太井遺跡でＦ５、余部日置荘遺跡でＥ５、第Ⅱ区画は太井遺跡で４、余部日置荘遺跡で 15 である。
5．断面図の土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』第 28 版　2006 年版　農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用した。なお、本文中における記載順序は、色名・記号・土質名の順である。
6．遺構番号は、遺構の種類に係わらず１からの連番で、遺構名は、番号―遺構の種類の順である。
7．遺構平面図の縮尺は、200 分の１、個別遺構の平面・断面図は 40 分の１としている。また、遺物の縮尺のうち、土器は４分の１、石器は３分の２、銭は２分の１としている。
なお、遺構の規模を記す場合、１メートル以上は、メートル表記で小数点第２位まで、１メートル以下は、センチメートル表記で、いずれも５センチメートルを最小単位としている。また、遺物の場合は、センチメートル表記で小数点第１位までで、１ミリメートルを最小単位としている。
8．参考文献は、以下の 10 に記す文献を除き、第４章末にまとめた。
9．写真の縮尺は、銭を除き任意である。
10. 出土遺物の記述においては、以下の文献を参考とした。

奈良国立文化財研究所 1981『平城宮発掘調査報告ＸＩ』奈良国立文化財研究所 30 周年記念学報
古代の土器研究会編 1992『古代の土器１　都城の土器集成』
古代の土器研究会編 1993『古代の土器２　都城の土器集成Ⅱ』
古代の土器研究会編 1996『古代の土器４　煮炊具』
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
中世土器研究会編 1995『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
永井久美男 1996『日本出土銭総覧　1996 年度版』兵庫埋蔵銭調査会

目　　次

巻頭図版
序　　文
例　　言
凡　　例
目　　次

第１章　経過…… 1
　第１節　調査の経過…… 1
　第２節　発掘調査の経過…… 1
　第３節　整理作業の経過…… 2
第２章　遺跡の位置と環境…… 3
　第１節　地理的環境…… 3
　第２節　歴史的環境…… 7
第３章　調査の方法と成果…… 13
　第１節　調査の方法…… 13
　　第１項　発掘調査の方法…… 13
　　第２項　整理作業の方法…… 13
　第２節　太井遺跡の調査成果…… 15
　　第１項　既往の調査成果…… 15
　　第２項　層序…… 15
　　第３項　遺構と遺物…… 17
　　第４項　まとめ…… 19
　第３節　余部日置荘遺跡の調査成果…… 21
　　第１項　既往の調査成果…… 21
　　第２項　層序…… 21
　　第３項　遺構と遺物…… 23
　　第４項　まとめ…… 35
第４章　総括…… 37

図　版
報告書抄録

図目次

図１　遺跡位置図……3
図２　遺跡周辺の地形……4
図３　周辺遺跡分布図……6
図４　地区割と調査地の位置……14
図５　太井遺跡　今回の調査地と近接する既往調査区平面図　……16
図６　太井遺跡　今回の調査地と近接する既往調査区の断面模式図　……16
図７　太井遺跡09－１調査区　断面図……17
図８　太井遺跡09－１調査区　遺構面平面図……18
図９　太井遺跡09－１調査区　出土遺物……19
図10　余部日置荘遺跡　今回の調査区と近接する既往調査区平面図　……22
図11　余部日置荘遺跡　今回の調査地と近接する既往調査区の断面模式図　……22
図12　余部日置荘遺跡09－１調査区　断面図……23
図13　余部日置荘遺跡09－１調査区　第１面平面図…24
図14　余部日置荘遺跡09－１調査区　第０層出土遺物25
図15　余部日置荘遺跡09－１調査区　第１面遺構平・断面図　……26
図16　余部日置荘遺跡09－１調査区　第１面遺構出土遺物　……26
図17　余部日置荘遺跡09－１調査区　第２面平面図…28
図18　余部日置荘遺跡09－１調査区　第１層出土遺物29
図19　余部日置荘遺跡09－１調査区　第３面平面図…30
図20　余部日置荘遺跡09－１調査区　第３面遺構平・断面図（１）　……32
図21　余部日置荘遺跡09－１調査区　第３面遺構平・断面図（２）　……33
図22　余部日置荘遺跡09－１調査区　第２層出土遺物34
図23　余部日置荘遺跡09－１調査区　第３面遺構出土遺物　……34
図24　余部日置荘遺跡09－１調査区と周辺調査区……37

表目次

表１　遺跡一覧……7

写真目次

写真１　太井遺跡　調査前の状況（西から）……5
写真２　余部日置荘遺跡　調査前の状況（北から）……5
写真３　太井遺跡　現代の土坑群と段丘崖（北から）　18
写真４　太井遺跡　近世小溝群（南から）……18

巻頭図版目次

１.太井遺跡　遠景
２.余部日置荘遺跡　遠景

図版目次

図版１　太井遺跡09－１調査区　遺構
１．断面（西壁）（東から）
２．断面（北壁）（南東から）
３．遺構面　全景（北東から）
４．遺構面　北西側（南から）
５．遺構面　南側（西から）
図版２　余部日置荘遺跡09－１調査区　遺構（１）
１．断面（西壁）（南東から）
２．断面（西壁）（南東から）
３．第１面　全景（北から）
４．第１面　２土坑断面（南から）
５．第１面　小溝群検出状況（北東から）
６．第２面　全景（北西から）
図版３　余部日置荘遺跡09－１調査区　遺構（２）
１．第３面　全景（北西から）
２．轍（12・13溝）（北東から）
３．轍（14・15溝）（北から）
４．轍（17・18溝）（北東から）
５．轍（19・20溝）（北東から）
図版４　余部日置荘遺跡09－１調査区　遺構（３）
１．第３面　７溝全景（東から）
２．第３面　７溝断面（西から）
３．第３面　８土坑断面（南東から）
４．第３面　10土坑断面（南から）
５．第３面　11土坑断面（南西から）
６．第３面　21土坑全景（北西から）
７．第３面　21土坑断面（北東から）
図版５　太井遺跡09－１調査区　遺物、
余部日置荘遺跡09－１調査区　遺物（１）
１．太井遺跡09－１調査区　側溝・包含層　土器
２．余部日置荘遺跡09－１調査区　側溝・第０層　土器
図版６　余部日置荘遺跡09－１調査区　遺物（２）
１．第１層・第１面　土器
２．第２層　土器
図版７　余部日置荘遺跡09－１調査区　遺物（３）
１．第１面　３溝　埴輪
２．第３面　７溝　土器
３．第１層　石器
４．第２層　石器
図版８　余部日置荘遺跡09－１調査区　遺物（４）
１．第１層　炉壁
２．第１層　羽口？
３．第１面　３溝　炉壁
４．第１層　鋳型？
５．第０層　銭

第１章　経　過

第１節　調査の経過

今回の報告に関する事業は、大阪府営水道中期整備事業「バイパス送水管布設工事」に伴う太井遺跡・余部日置荘遺跡発掘調査である。大阪府営水道中期整備事業計画は、大阪府水道部により、平成 17 年３月 30 日に決定された。このうち、バイパス送水管整備は、藤井寺ポンプ場と泉北浄水池間を結ぶものである。その整備方針及び目的は、事故などによる送水停止の影響が最も大きい当該区間の送水施設のバックアップ機能を向上させること、当該区間の管路更新時の代替機能を確保すること、阪神・淡路大震災クラスの地震にも対応できるような水道施設の耐震性の向上を図ること、貯水機能の活用を図るため、大容量送水管としてバイパス送水管を位置付け、立坑などを震災時などの応急給水拠点として整備すること、新たな送水形態を構築し、効率的な水運用による送水エネルギーの削減を図ること、の各点である。

今回の太井遺跡と余部日置荘遺跡の２箇所は、このバイパス送水管に伴う立坑が掘削される箇所における調査である。委託者である大阪府水道部南部水道事業所とは、平成 21 年７月１日付で契約を締結した。

第２節　発掘調査の経過

今回の発掘調査は、調査課調整グループが行った。調査の体制、期間等については、例言に記したとおりである。

上記のとおり、今回の調査は遺跡を異にする２箇所である。太井遺跡側の調査地が府立農芸高校の用地内にあたり、調査可能になるのが８月１日以降ということであったため、余部日置荘遺跡側より着手した。

余部日置荘遺跡における調査は、７月 22 日より開始した。22 日には調査位置を確認し、翌 23 日に機械掘削を行い、24 日より人力掘削を開始した。側溝を掘削したところ、調査区南西側が低く、北東側に高いことがわかった。また、断面の状況から調査面を３面と判断した。そして、第１面については７月 31 日に、第２面については８月５日に、第３面については８月 12 日に、それぞれ全景写真の撮影を行い、遺構面の平面図作成、遺構図面の作成等を行った。なお、第３面は最終遺構面であり、掘削がおおむね完了した 10 日に大阪府教育委員会の最終立会を受け、12 日に航空測量を行った。その後、８月 17・18 日に埋め戻しを行った。

太井遺跡における調査は８月 20 日より開始した。20 日には調査位置を確認し、機械掘削を 21 日まで行った。その後、24 日からは、人力掘削を開始した。側溝を掘削したところ、現代や近世の作土層以下は、粒度は様々ながら、砂礫層であった。第３章第１節の調査の方法で記しているように、この状況は、過去の調査と同様な状況であった。過去の調査成果を鑑みた上で、調査終了面を砂礫層上面とすることを、28 日の大阪府教育委員会の立会で決定し、同面までの掘削を行った。最終的に、９月 11 日に航空測量および、大阪府教育委員会の最終立会を受け、その後 14 日まで埋め戻しを行った。15 日には、現場での作業を全て終了した。

第３節　整理作業の経過

今回の整理作業は、調査課調整グループが行った。整理の体制、期間等については、例言に記したとおりである。作業の詳細については、第３章第１節に記したとおりである。

整理作業のうち、基礎的な整理作業である、遺物の洗浄、注記は、調査の合間に実施し、９月末までに終了した。遺物については、その後実測対象とする遺物を抽出し、10 月初旬に実測を行い、その後、報告書掲載用の版組、トレース等を 10 月末までに実施した。また、すべての出土遺物については、10 月から 11 月の間に随時登録台帳を作成し、報告書掲載遺物についても、遺物台帳を作成した。10 月下旬から 11 月中旬には、写真掲載遺物の撮影、紙焼きを写真室にて行った。紙焼きを行った写真の入稿用の貼り込み作業は、11 月下旬に行った。最終的に、11 月末までに上記の作業を終了し、実測遺物および実測対象としなかった遺物とも、コンテナに収納した。

現場で撮影した写真については、それぞれの媒体ごとに、９月末までに収納作業を行った。その後、報告書に掲載する遺構写真を選択し、写真室にて 11 月中旬に紙焼きを行った。紙焼きを行った写真の入稿用の貼り込み作業は、11 月下旬に行った。

現場にて作成した図面類は、９月末までに簡便な整理を行った。これらから、報告書掲載用の図面作成、トレース等の作業を 10 月から 11 月中旬に行った。

これらの作業と並行し、報告書本文を作成した。最終的に、平成 22 年３月 31 日に本書を刊行し、全ての業務を完了した。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

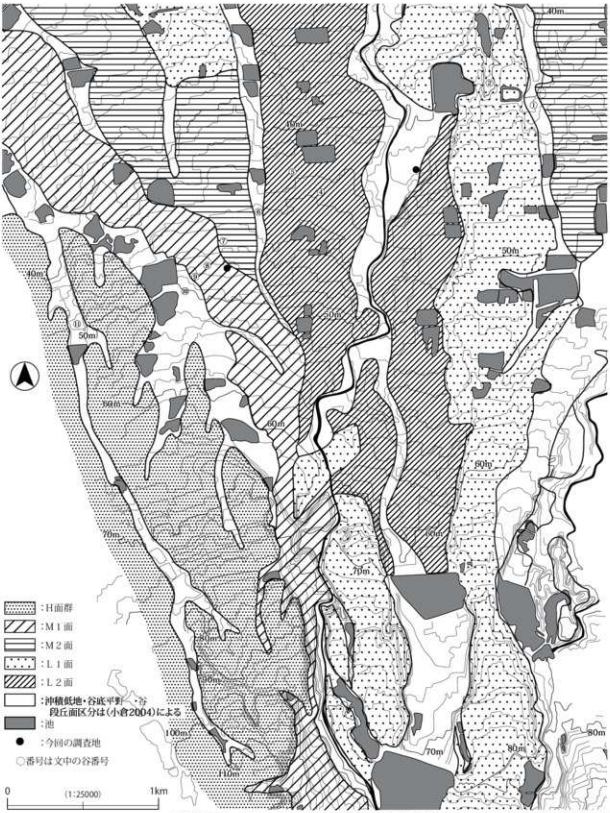
太井遺跡と余部日置荘遺跡は、大阪府中南部に位置する堺市の東部に位置する（図１）。そして、両遺跡は、西除川を挟んで東西に隣接する関係にある（図２・３）。

太井遺跡は、堺市美原区（旧南河内郡美原町）黒山・太井に所在し、その範囲は、南北約 1.4 ㎞、東西約 0.65 ㎞である（図３の１）。遺跡は、河泉丘陵の一部をなす羽曳野丘陵の北西方向にあたり、美原区の東西をそれぞれ北流する東除川と西除川に挟まれた低位段丘、河内台地上に位置する。そして、遺跡西側の西除川に近づくにつれ、谷底平野が形成されている（図２）。小倉博之氏の段丘面分類（小倉 2004：87 頁）に従えば、遺跡北東端の、黒姫山古墳（図３の３）東側で確認できる深い開析谷（谷①：太井遺跡、余部日置荘遺跡内にみられる谷を東側より①から順番に番号を付した。以下同。）を境に東側の真福寺遺跡側がＭ２面、西の太井遺跡側がＬ１面、阪和自動車道（以下、阪和道と略）調査のＩ地区（図３の１太井遺跡北西外にある池）にぬける谷（谷③）を境に、その西側からＪ地区（図５）西端までがＬ２面となる。この谷③は、現地表面においては段丘崖の段差として認識しうるが、阪和道調査で谷地形が確認されている。なお、Ｌ１面上にも、土地条件図（国土地理院 1983）にも記されている谷（谷②）が、黒姫山古墳西側にも見られる。

図１　遺跡位置図

今回の調査地は、遺跡の西端、阪和道沿い南側（写真１、巻頭図版１）、西除川右岸の谷底平野に位置し、調査地のすぐ南には、比高差 2.5 ｍ程の段丘崖が見られた。ただし、段丘崖上には水路が開削されており、実際の比高差はこれよりも低いのだろう。そしてこの段丘崖より上面が低位段丘面（小倉氏のＬ２面）となる。調査地の現況の標高は、Ｔ．Ｐ .40.2 ｍ前後である。

余部日置荘遺跡は、堺市美原区南余部・北余部、東区日置荘田中町・日置荘原寺町・丈六・高松に所在し、その範囲は、南北約 1.4 ㎞、東西約 1.2 ㎞である（図３の２）。遺跡は、西除川西側に位置し、遺跡東側の西除川付近では、谷底平野が形成されているが、遺跡東半が低位段丘、西半が中位段丘で、泉北台地上である。そして、遺跡西端は、高位段丘であり、遺跡内には複数の開析谷が入り組む（図２）。太井遺跡同様、小倉博之氏の段丘面分類に従えば、小寺遺跡（図３の 17）西側外の池から小寺・日置荘北町遺跡間の池を抜け、阪和道調査Ｇ地区西側の谷地形など（谷⑥）を境に、東側がＬ２面である。一方、その西側は、遺跡の北西側ではＭ２面、西側ではＭ１面である。Ｍ２・１面の境は、遺跡北西では南海高野線やや北東付近から遺跡南端美原区側にある池（新池・掛池）付近で、この遺跡南端付近では、Ｌ２面西がＭ１面となる。さらに、Ｍ地区の今池・剣池（図３の東区の文字部分にある池）のある谷地



（鎗柄 1995 a）の呼ー図５および大阪府昭和 36 年測量 3000 分の１地形図より等高線図作成

図２　遺跡周辺の地形

形を境に西側がＨ面となる。

今回の調査地は、遺跡の中央やや東側、南海高野線と阪和道が交差する南東側（写真２、巻頭図版２）、中位段丘から段丘上の谷地形に向かいやや地形が下がる箇所に位置する。調査地の現況の標高は、Ｔ．Ｐ.47.9ｍ前後である。

ちなみに、遺跡の立地する段丘面の形成時期だが、ここでは海水準変動を積極的に評価する見解をもとにする。まず、高位段丘であるＨ面構成層には、酸素同位体ステージ（以下、ＭＩＳと略）７の段階に堆積したＭａ（海成粘土）11 層が見られることから 24 万年前～ 19 万年前頃に堆積し、ＭＩＳ６にかけて段丘化した。次に、中位段丘であるＭ１面構成層にはＭＩＳ５の段階に堆積したＭａ 12 層が見られ、ＭＩＳ６から５に向かい温暖化する時期である最終間氷期である 12 万年前頃に堆積し、やや寒冷化するＭＩＳ５．４にかけて段丘化した。Ｍ２面構成層は、以後弱い温暖化と寒冷化を繰り返すＭＩＳ５の段階に堆積し、ＭＩＳ４にかけて段丘化した。Ｍ２面段丘構成層中にＣ 14 年代で約９万 1000 年前に降下したとされる北花田火山灰層（Ｋ－Ｔｚ）や約８万 7000 年前降下の吾彦火山灰層（Ａｓｏ－４）が見られ、10 万年前～７万 5000 年前頃の堆積だろう。ちなみに、河内台地を北上した瓜破台地およびその周辺に立地する大阪市長原遺跡では、中位段丘構成層上部のＮＧ 16 層で両火山灰層が確認されている（趙 2001）。また、泉北台地北西側の低位段丘上に位置する堺市南瓦町遺跡では、低位段丘構成層中以下に存在する中位段丘構成層最上部からＫ－Ｔｚが確認されている（矢作ほか 2003）。さて、Ｌ１面構成層は、ＭＩＳ３の段階に堆積し、ＭＩＳ２にかけて段丘化した。Ｌ１面段丘構成層中上部に約２万 5000 年前降下の平安神宮火山灰層（ＡＴ）が見られ、５万年前～２万 5000 年前頃の堆積だろう。その後、約２万年前に最終氷期最寒冷期があり、一転温暖化する時期にＬ２面構成層が堆積したようである（長橋ほか 2004、小倉ほか 1992、小倉 2004：88 頁）。

詳細については語りえないが、海水準変動のみならず地質構造をも評価すべきなのだろう。これは、より身近な例では、調査において確認される谷で、開析谷とされるものの中に、構造谷が含まれる可能性の指摘もあり（趙 2001）、当然重要な視点である。また、地殻運動による石川による天野川（西除川上流域）の河川争奪の指摘もあるし（小倉 2004：86 頁など）、大阪平野南部の丘陵・山麓地域は隆起傾向にあるともされる（同 88 頁）。上記の段丘面形成に、人がかかわることはなかろうが、このような諸段階を経て、形成された地形上に人の生活が営まれるのであり、近現代以前までの開発に際しては、その克服しうる地形の諸段階があったわけである（金田 1997）。

写真１　太井遺跡　調査前の状況（西から）

写真２　余部日置荘遺跡　調査前の状況（北から）

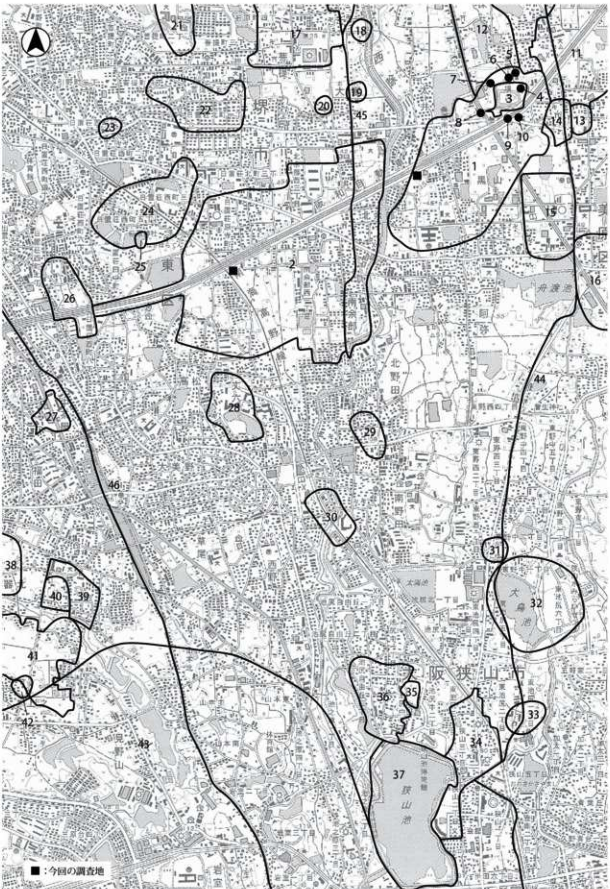


図3　周辺遺跡分布図　（国土地理院 2007）使用、遺跡位置は大阪府地図情報提供システムによる

表１　遺跡一覧

番号	遺跡名	時代	種類	番号	遺跡名	時代	種類
1	太井遺跡	奈良・平安・中世・近世	集落跡・生産遺跡	24	目置荘西町遺跡	古墳・中世・近世	集落跡
2	余部日置荘遺跡	古墳・奈良・平安・中世	集落跡・生産遺跡	25	鉄池古墳群	古墳	古墳
3	黒姫山古墳	古墳	古墳	26	目置荘西町窯跡群	古墳	生産遺跡
4	どん山古墳	古墳	古墳	27	中条屋遺跡	古墳	集落跡
5	鎮守山古墳	古墳	古墳	28	丈六池遺跡	古墳・中世	集落跡・生産遺跡
6	黒姫山北子持ち勾玉出土地	古墳	散布地	29	北野田遺跡	古墳・奈良・中世	集落跡
7	けんけん山古墳	古墳	古墳	30	野田城跡	中世	城館跡
8	きる山古墳	古墳	古墳	31	東野廃寺跡	奈良・平安・中世	社寺跡
9	さぼ山古墳	古墳	古墳	32	大鳥池遺跡	縄文	散布地
10	無名塚24号墳	古墳	古墳	33	東池尻遺跡	中世	集落跡
11	真福寺遺跡	奈良・平安・中世・近世	集落跡・生産遺跡	34	狭山藩陣屋跡	近世	城館跡
12	大保遺跡	奈良・平安・中世	集落跡	35	池尻遺跡	古墳・奈良・平安・中世	集落跡
13	丹比神社	奈良・平安	社寺跡	36	池尻城跡	中世	城館跡
14	黒山廃寺	古墳・奈良・平安・中世	社寺跡	37	狭山池	古墳・奈良・平安・中世	その他（池）
15	黒山遺跡	奈良・平安・中世・近世	散布地	38	陶器遺跡	古墳	集落跡
16	平尾遺跡	奈良	散布地・集落跡	39	小角田遺跡	古墳・中世	集落跡・生産遺跡
17	小寺遺跡	中世	集落跡	40	陶器城跡	中世	城館跡
18	長和寺跡	平安	社寺跡	41	陶器廃遺跡	古墳	散布地
19	八坂神社遺跡	平安	社寺跡	42	陶荒田神社遺跡	古墳・奈良	集落跡
20	城岸寺城跡	中世	社寺跡	43	陶色窯跡群　陶器山地区	古墳・奈良・平安	生産遺跡
21	石原町遺跡	旧石器・古墳・中世	集落跡・城館跡・生産遺跡	44	中高野街道	平安・中世・近世	その他（街道）
22	目置荘北町遺跡	奈良	散布地	45	下高野街道	近世	その他（街道）
23	初芝遺跡	古墳	散布地	46	西高野街道	近世	その他（街道）

大阪府地図情報提供システム（http://www.pref.osaka.jp/jigyokanri/cals/index.html）を基に作成

第２節　歴史的環境

太井遺跡・余部日置荘遺跡周辺には多数の遺跡が存在する（図３）。太井遺跡の北東には真福寺遺跡（11）、東には黒山廃寺（14）、北には大保遺跡（12）、南東には黒山遺跡（15）が、それぞれ位置する。なお、真福寺遺跡内を中高野街道（44）が、余部日置荘遺跡東部を下高野街道（45）が、それぞれ縦断し、遺跡の北約２kmに竹之内街道が東西に横断する。一方、余部日置荘遺跡の西には日置荘西町窯跡群（26）が接し、北には小寺遺跡（17）、八坂神社遺跡（19）、城岸寺城跡（20）などが、北西には日置荘西町遺跡（24）が、南には丈六池遺跡（28）が、それぞれ位置する。

太井遺跡・余部日置荘遺跡では、旧石器時代～近世にいたる遺構、遺物が見つかっている。以下の遺跡の時期ごとの動態については、阪和道調査時の成果を中心に記す（江浦編 1995・1996）。

第１項　太井遺跡

太井遺跡では、旧石器時代の可能性も考えられる包含層が確認されているが（中村・松山 1987：11－25 頁）、多くは中世以降の包含層などからの出土である。有舌尖頭器などの出土も少ないながら見られ、原位置を保っている可能性があるものも見られる（山上・市本編 1987：７頁、江浦編 1996：20 頁）。

縄文時代では、自然流路、落ち込みが確認されている程度で、遺構の検出はない。遺物は、流路や後世の包含層からの出土ながら、晩期の凸帯文土器のほか、石匙、石錐、石鏃などの石器の出土も見られる（中村・松山 1987：26－30 頁、江浦編 1996：20・89・180－184 頁）。

弥生時代でも、顕著な遺構は確認されていない。遺物は、流路や後世の包含層からの出土ながら、中期中頃や後期の土器、中期の石鏃などの石器の出土が見られる（江浦編 1996：20・89・184 頁）。

古墳時代では、周濠を巡らせた二段築成の前方後円墳で、全長 114 mの黒姫山古墳（図３の３）がまず挙げられる。この周辺には、近年まで６基の古墳の存在が指摘されており（同４・５・７～10）、このうち帆立貝形古墳のさぼ山古墳（同９）が調査されている（山上・市本編 1987：８－16 頁、市本 1990、江浦編 1996：21－30 頁）。また、この南西側、遺跡内中央付近の調査では、小規模な方墳も確認され、古墳以外に、埴輪円筒棺、土坑墓も検出されている（鋤柄・江浦編 1987：７－13 頁、江浦編 1996：91－97 頁）。遺跡西側では当該期の遺構は希薄であり、５世紀末～６世紀初頭頃の須

恵器などが出土したピットがわずかに見られる程度である（中村・松山 1987：31 － 38 頁、江浦編 1996：185 － 189 頁）。一方、遺跡南西端の農芸高校（図３の高等学校の地図記号地点）の調査では、後期の竪穴住居や掘立柱建物の検出が見られる（阿部 2006）。

古代では、飛鳥～奈良時代（７世紀後半～８世紀中頃）の建物群、鋳造工房跡が検出され（江浦編 1996：136 － 152 頁）、当地域を本願地とする多治比真人との関連や統一新羅土器の出土との関係も示唆されている（鋤柄・江浦編 1987：36 － 52 頁、江浦編 1996：160 頁、江浦 1987）。この統一新羅土器が出土した調査地（H地区）に近接して南側で行われた調査でも、８世紀前半頃の遺構群が検出されている（鹿野 2004）。遺跡東端部の谷①内での調査では、８世紀中頃とされる掘立柱建物が検出された他、鋳鉄の溶解・鋳造にかかわる遺物の出土も見られ、当該期における段丘上から谷部への活動展開がうかがえる（小谷 2007）。また、上記の鋳造関連遺構との連続性はないようではあるが、平安時代頃とされる炉壁や鞴羽口などの集積遺構や鉱滓を廃棄した遺構などが検出されている（中村・松山 1987：45 － 47 頁、江浦編 1996：195 － 199 頁）。この正確な年代は不明だが、炉壁集積部分から検出した炭化物の ^{14}C 年代測定では、910 ± 120 ＢＰという値が得られている（中村・松山 1987：47 頁）。この他、詳細な時期は不明だが、遺跡北東端から大保遺跡にかけての確認調査でも、鋳造関連遺物などの出土が見られる（杉本 2004）。このように、奈良・平安時代で鋳造関連遺構・遺物が見られるものの、両者が連続しない点は興味深い。

中世になると、それまでと一転して遺構、遺物とも希薄となり、遺跡の北東側（Ｂ・Ｃ地区南半部）で、12 ～ 13 世紀代、14 世紀末～ 15 世紀前葉の大きく２時期に、ややまとまって見られる程度となる（江浦編 1996:79 頁）。また、この時期の居住域は、調査地より南側に広がっていると推定されている。概ね、遺跡全域が耕作地となっていたようである。なお、近代では、掩体の検出も見られる（江浦編 1996：159 頁）。

当遺跡にかかわると推測できる文献の記述としては、『日本書紀』孝徳天皇、大化５（650）年３月の蘇我臣日向が蘇我倉山田石川麻呂を中大兄皇子に讒言し、謀反を疑われたくだりで「将軍大伴連等及」到_黒山_」と「黒山」の名が見えるのが古い例である（直木編 1987:史料 128、番号は史料の通し番号）。なお、鋤柄俊夫氏は、直木孝次郎氏や吉田　晶氏の研究（直木 1976・1985 a・b、吉田 1983）をひき、６～８世紀代の当該地域には、丹比連と丹比公が居住していたと推測され、黒山郷を本貫地とする秦氏も考慮されている（鋤柄 1995 a）。このように、当遺跡部分が『和名類聚抄』に記されている丹比郡の郷名のうち、黒山郷に相当するとされている。なお、『大阪府の地名』では、黒山郷の範囲について、近世丹南郡黒山村・阿弥村・太井村など西除川東側の地域を中心とし、西側の小寺村・今井村をも含むと推定されている（直木ほか監修 1986：807 頁）。また、水野正好氏（1978）も、上黒山、下黒山にとどまらず、太井や余部のあたり、八上郡境に近い地域を含めた広い郷域をもっていた可能性を指摘されている。郷については、平安時代中期には一定の地域をなし、それが天平元（729）年前後には画定され、おおよその地域としてはそれ以前の里を受け継いだもので、12 世紀頃までは地域的なまとまりを崩さなかったとの見解が高重　進氏（1975）により説かれている。そして、郷の規模は 50 戸分の口分田 195 町、宅地 10 町、園地 45 町とされる。『大阪府全志』（井上 1921）によれば、町村制施行時（明治 22 年頃か）ながら、田の面積は黒山・太井・阿弥で 200 町程、余部 100 町程、今井 33 町程、小寺 69 町程で、合計約 402 町である。当然、いわゆる太閤検地による町の規模変更があるので、太閤検地規格にあわせれば上記口分田は約 161 町となる。原田信男氏による明治以前耕地（水田）面積の推移（原

田 2008：21 頁）を参考にすると、平安時代中期（『和名類聚抄』）から明治 14（1881）年までで約３倍になっている。上記 161 町と 402 町を比較すれば、約 2.5 倍であり、個別土地条件を無視しているものの、あながち的外れな数値ではない。ここからは、上記郷域推定が妥当であるように思える。

丹比郡の条里については、延久４（1072）年９月５日の太政官牒の丹北郡関係の項の「壱条」「北参条」（河音編 1991：史料 202、番号は史料の通し番号、以下同文献よりの引用の際は史○と略）や、久安２（1146）年 10 月 17 日の僧頼円田地売券「八上郡野遠郷萩原里」などから、当該時期には条里制が施工され、条里呼称がなされていたことがわかる（直木ほか監修 1986：804 頁）。また、黒山郷においても建暦元（1211）年の広階姉子田地処分状案に「河内国丹南郡黒山郷河辺里」（史 236）とある。

当遺跡にかかわる荘園としては、「田井荘」が挙げられる。田井荘は、保延３（1137）年の石清水田中家文書、石清水八幡宮検校光清譲状案に「相博庄田井」と見えるのが初見で、石清水八幡宮領とされる（直木ほか監修 1986：1111 頁）。田井荘の名は、正元元（1259）年の源姉子等田地売券「田井庄黒山郷河辺里」（史 249）、弘安９（1286）年の田井庄大饗郷天野一切経田里坪付案「田井庄大饗郷」（史 264）、徳治２（1307）年の田井庄領家某御教書「萩原里」（史 273）、同年の掃守かけ吉畠地売券「田井御庄黒山郷川辺里」（史 275）、至徳４（1386）年の従渭田地売券「田井庄八上郡野遠郷山川里」（史 325）、嘉慶３（1389）年の運性等田地売券、および康応２（1389）年の尼妙性等田地売券「八上郡田井御庄野遠郷萩原里」（史 326・327）、康応２（1390）年の兵衛三郎田地売券「田井荘野遠郷山川里」（史 328）、応永２（1395）年の尼億一田地売券「田井庄野遠郷山川里」（史 337）がそれぞれ見られる。このことから、すでに鋤柄氏（1995 a）が指摘されているところであるが、田井荘が黒山郷、大饗郷、野遠郷に広がる荘園であったといえる。ただ、そのより絞り込んだ位置については、上記文献の里名が参考になりそうだが、現在の字名からは推測できない。現在の字名は、中世の里名を払拭するかのような形で付されているように思える。なお、上記の徳治２（1307）年の田井庄領家某御教書（史 273）や、文明 17（1485）年の季弘大叔の日記『蔭軒日録』（史 397）には「田井庄昌福寺」とあり、観応元（1350）年の長福寺文書、野遠郷昌福寺住僧職譲状案などから、同一として良ければ野遠郷に昌福寺があったことがわかり、地理的な一点を捉えうる可能性がある。しかし、現存しないようであり不明なままである。なお、福岡澄男氏（2002）は、京都長福寺文書から 13 世紀以降、長福寺末寺に昌福寺がなっていくことに触れ、さらに藤澤一夫氏の見解（藤澤 1954・1995）を引用し、萩原神社社域に存した６箇寺が中世に移転したうちの、北寺へ移転した正福寺がこの昌福寺とし、長福寺文書 618 号（史 326 が同様な史料）から、萩原里四坪近辺にあったとされる。

丹比郡は平安時代後期に丹北・丹南・八上の三郡にわかれ、上述のように黒山や太井の地は丹南郡に基本的に含まれる。享保 20（1735）年刊の『日本輿地通志畿内部』には、『和妙類聚抄』同様に郷名が記される（田中 1988：229 頁）。このうち田邑郷について「己廃存_太井村_」とある。これを受けてか、『日本地理志料』（1903 年）や『大阪府全志』（井上 1921：545 － 546 頁）では、太井と田邑郷とを結びつけるが、『大阪府の地名』のとおり、田邑郷は丹北郡田井城村（現松原市）を指すとすべきであろう（直木ほか監修 1986：808 頁）。このため、やはり当遺跡の地域が黒山郷に位置したといえる。

当遺跡のみならず、当該地域の開発を考える上で、狭山池の存在は重要である。狭山池は、文献では『行基年譜』に天平３（731）年、行基が改修した記述があり（直木編 1987：史料 182）、『続日本紀』天平宝字６（762）年４月８日、堤防決壊に対する改修の記述がある（同：史料 263）。平成の改修に伴い実施された発掘調査で検出された東樋の樋管の年輪年代測定の結果、この木材が 616 年に伐採された

ことがわかり、同年頃に狭山池が築造されたと推定されている（光谷 1998）。舘野和己氏（2004）は、推古天皇 24 年である 616 年は、それに先立つ同 15（607）年に倭・山背・河内三国での地溝開発と国ごとに屯倉をおくという『日本書紀』の記述などから、推古朝にヤマト王権による地溝開発と、ヤマト王権が自ら開発し田地を伴うミヤケ（舘野氏のＢ２型ミヤケ）設置の画期とされる。そして、王権による地溝開発がこれ以前になかったのではないものの、重要な意味をもった地溝開発が主に推古天皇のときに行われたとされる。開発の実際について小山田宏一氏（2002：64 頁）は、７世紀以降、東除川左岸の標高 40 ～ 60 m付近の、当遺跡や北東側の真福寺・丹上遺跡などは、河川からの取水が難しく、西除川を塞き止めるダム式の狭山池が築造され、ここからの用水路は、南から北へ下る地形を利用し、谷底から台地にのぼり、東除川左岸の高所を南下したと推測されている。また、市川秀之氏（1998：500 頁）は、奈良時代の狭山池の改修等の意義について、８世紀を契機として下流域の遺跡が営まれることから、南河内の段丘面上開発が大きな目的であったとする。平安時代後半には、これらの遺跡の衰退気味となるが、1202 年の重源による改修で、狭山池から送られた水を貯めるための池ネットワークが整備・拡大されたとされる（小山田 2002:64 頁）。この頃以降、太井遺跡内は耕作地となっていたと考えられ、この恩恵を受けていたのであろう。遺跡の動態に狭山池の動態が大きくかかわっていることがわかる。

江戸時代における、狭山池からの灌漑経路において、慶長 17（1612）年の狭山池からの番水は、中樋筋に属した。狭山池から大満池を経て北へ流れた水は、まず太井に排水される。この際、太井村の持ち池である阿弥村域にある前ヶ池（舟渡池の西にあった池で現存せず）（川内 1999）に水を入れたとされている（狭山池調査事務所事務局 1999）。第１節の小倉氏の段丘面区分で説明すると、大満池→Ｌ２・１面境の谷→Ｌ１面上の谷→前ヶ池でＬ１面北端の太井周辺を灌漑であり、谷地形と段丘面上の傾斜を利用した灌漑であろう。一方、黒山村へ水を送る順番は６番目で、舟渡池が黒山村の持ち池である。

その後、明治 22（1889）年に黒山や太井は同郷と推定される阿弥のみならず、余部郷と目される北余部・南余部をも含み、丹南郡黒山村となり、1956 ～ 1958 年の合併、編入を経て丹南郡美原町が成立し、明治 29（1896）年には丹南郡他７郡が統合され南河内郡となった。平成 17（2005）年２月に堺市に編入合併され、翌年政令指定都市移行に伴い区制が施行され堺市美原区となり今日に至っている。

第２項　余部日置荘遺跡

余部日置荘遺跡では、旧石器時代～縄文・弥生時代の遺物の出土は、遺跡内調査地各地で見られるが、いずれも中世以降の遺構埋土や包含層から出土したものであり、良好な包含層は確認されていない（江浦編 1995：21 － 23・460 － 461・533 － 534 頁）。

古墳時代には、遺跡東側の西除川を望む低位段丘東端部で６世紀中葉頃の集落が確認されている（中村・金光編 1988：９－ 18 頁、江浦編 1995：24 － 34 頁）。また、遺跡西側（Ｌ地区、図 10）では、６世紀中葉～後葉にかけて操業された須恵器窯が（江浦・岡本編 1988、江浦編 1995：352 － 378 頁）、現在は行政上日置荘西町窯跡群（図３の 26）に含まれる地区でも、同様な時期の埴輪窯、須恵器窯が（入江ほか 1988、入江・岡本 1989、江浦編 1995:462 － 483・534 － 581 頁）、それぞれ検出されている。この他、日置荘西町窯跡群における堺市教育委員会による調査でも、同様な時期の須恵器窯などが検出されている（十河 1991、鹿野 1990、増田 1995 など）。一方、日置荘遺跡南西端での調査（ＨＫＳ－３）では、６世紀中葉頃の須恵器窯灰原が検出されている（續 1986）。なお、遺跡北側（図３の２余部日置荘遺跡内、阪和自動車道の「阪」の字の北側付近）での調査では、６世紀後半頃に遡る可能性が示唆さ

れている畝溝、６世紀末～７世紀頃の掘立柱建物が検出されている（上林 1999、小浜・上林 2002）。

古代では、飛鳥時代の溝がわずかに検出されているが（Ｂ・Ｇ・Ｉ地区など）（江浦編 1995：36・194 頁）、基本的に同時代の遺構、遺物とも希薄である。奈良時代も傾向としては同様で、８世紀前半頃と考えられる建物群が、遺跡中央（Ｍ地区、図 10）で検出されている（江浦・岡本編 1988：21 － 25 頁、江浦編 1995：381 頁）。この他、７～８世紀代とされる轍の検出も見られる（上林 1999、小浜・上林 2002）。

11・12 世紀になると、遺物量は少ないものの、各地で出土が見られるようになる。そして、13～15 世紀には、多くの遺構、遺物が検出され、遺跡東側では寺院関連遺構と城郭が検出されている（江浦編 1995：184 － 186 頁など）他、屋敷地がＬ２面からＭ２面にかけて密に展開する（同：339 － 342 頁）。ただし、西側の中位段丘面（Ｍ１面）では遺構が乏しく、一部は耕作地化し、鎌倉時代の土壙墓の検出も見られる（同：450 頁）。また、阪和道調査時以降、特に旧余部遺跡西半で府営住宅建替等に伴い、大阪府教育委員会や財団法人大阪府埋蔵文化財協会、財団法人大阪府文化財調査研究センター等により密に調査が行われ（森屋ほか 1998、枡本 1999、枡本ほか 2000、林ほか 1998、上林 1999、小浜・上林 2002、西川ほか 2003、西口 2004、阿部 2008、寺川ほか 1997）、特に 13 世紀代を中心とした、多数の遺構、遺物が見られる。特に、阪和道北側の各調査では、多量の鋳造関連資料から、河内鋳物師の活動をうかがうことができる。この他、遺跡北西部の調査（ＨＫＳ－９・14）では 12 ～ 14 世紀頃の掘立柱建物などが検出されている（續 1991、小谷 1997）。これらの鎌倉時代の初め頃の興隆は、太井遺跡同様、重源による狭山池改修と軌を一にしている（小山田 2002：64 － 65 頁）。しかし、16 世紀以降には急激に遺構、遺物とも減少する。

当遺跡にかかわると推測できる文献の記述として、『新撰姓氏録』の未定雑姓、和泉国の「日置部」の名が見られ、「天櫛天命男天櫛耳命之後也」とある。江浦氏（1991：12 頁）は、日置荘遺跡の条里制施工段階の開発について、その第一段階である、理念としての条里制を含む条里制の初見段階の律令期（奈良時代・８世紀）において、「日置部」との関連を考慮されている。ただし、当地に直接かかわると推測できるような「日置」姓の人物は文献に見られない（竹内ほか編 1985：1584 － 1595）。また、たしかに微妙な地理ではあるが、本来河内に属するとされる当地域にもかかわらず、『新撰姓氏録』では和泉国に記される。また、後述するように日置の名が郷名になることもなく、当該地域の郷名は必ずしも定かではない。「日置部」の勢力や丹比氏との関連など気になるところではある。

さて、当遺跡にかかわる郷名としては、『和名類聚抄』には記されていないが、「河内国西琳寺縁起」所引、天平 15（743）年帳に、養老６（722）年に受戒した「僧智蔵」について「丹比郡（原文、舟北郡）余戸郷･･･」とあり（直木ほか監修 1986：809 頁）、奈良時代前期には余戸郷が存在したのだろう。古く、評制下の五十戸・里には、『和名類聚抄』の郷に継承されないものが少なくないともされ（吉川 2004）、その一例なのかもしれない。余戸郷については、これ以外に見られず不明な点が多いが、その名から当遺跡が余戸郷にかかわると推測できる。ただ、郡を構成する里に端数戸が生じた場合など余戸（あまるべ）と呼んで一里としたというから（永原監修 1999、渡辺 2001：60 頁）、他郷の端数戸がある時期余戸郷とされ、後に他の郷へ名を変えるか、統合するかなどしたのだろうか。しかし、広大な領域を占める余部村からは考えにくいとの見解もある（上林 1999：44 頁）。第１項にて記したように、黒山郷の郷域が西除川左岸まで広がるのであれば、基本的に古代における狭山池の灌漑域から外れることからも、同郷の端数戸であったとも憶測される。遺跡の動態からは、８世紀頃までの遺構等が見られるものの小規模であり、当該期がそのような端数戸的状況であり、古代後半の遺構は見られず、集

落が一定期間廃絶しており、『和名類聚抄』に郷名は記されず、本来の意味を失った「あまべ」の名が、その後も地下水脈的に残存したとするのは、想像にすぎるだろうか。一方、『和名類聚抄』の郷名について、『大阪府の地名』では、土師郷を考慮する（直木ほか監修 1986：809 頁）。これは、天平勝宝 9（757）年の西南角領解中の河内画師鯨と広川について、「河内国丹比郡土師里･･･」との記述が見られ、この頃であれば里は廃止されているはずで、土師里を土師郷と解釈し、大鳥郡土師郷が隣接することからの推定である。また、藤澤一夫氏（1954・1995）は当遺跡に近接する萩原神社を土師氏との関連で理解しうることを示唆される。ただ、葛井寺（剛琳寺）旧蔵の仁平 4（1154）年紀大般若経奥付に同寺の所在を「舟（丹？）南郡土師郷」と記すことや、『大乗院寺社雑事記』長禄 2（1485）年 8 月 3 日条に「河内国丹南郡土師郷之内、興福寺東金堂末寺剛琳寺」と記すことから、少なくとも 12 世紀中頃から 15 世紀後半には、土師郷とは葛井寺周辺を指していたことがわかる。同じ頃、遺跡名が示すように、当遺跡にかかわる荘園として考えられる「日置荘」の名が、仁安 2（1167）年の真継文書、蔵人所牒写に興福寺領として初見でき、「河内国丹南郡狭山郷内日置庄鋳物師等」とある（直木ほか監修 1986：1350 頁）から、この頃には、狭山郷に属していたことがわかる。なお、江浦氏（1991：12 頁）は、上記の開発の第一段階に続く第二段階の開発として、条里制下における実際的運用段階を平安時代、特に 10 世紀に求め、その主体として日置荘の存在を考慮している。

上記と重複するが、中世にはいうまでもなく河内鋳物師の中心地のひとつとして栄える。鋤柄氏は、11 世紀に日置荘鋳物師が記録に出てくる背景として、律令行政村落の基本である 50 戸 1 里制が解体し、中世的郡郷制が登場する 10 世紀中葉の時期や、鋳造工人組織の変革期が関連した結果と推測されている（鋤柄 1999：365 頁）。日置荘は、上述のように 1167 年にはその存在が確認できるが、入間田宣夫氏（1976：125 頁）が例示される『平安遺文』681・682 に見られる 11 世紀中頃の和泉国内における荘園の濫立などと軌を一にしているのかもしれない。なお、日置庄鋳物師については、上記の 1167 年以降、文永 3（1266）年の阿蘇品文書に「右方鋳物師者、日置・金田・長曽祢此三ヶ所也」とあり（河音編 1991：史料 69）、その位置づけや広がりがわかる。

江戸時代において、日置荘の地域も、当然狭山池から水を引いていたのだが、上述の太井が中樋筋であったのに対し、西樋筋に属していた。慶長 17（1612）年の番水は、西除川から野田の一の関を介し、丈六村、高松村、そして原寺村、北村、西村の順で、余部の地域はこれに遅れ、南余部南側の余部村樋を介し、北余部村、南余部村の順であった。西除川から谷筋を利用し、Ｌ 1 面からＭ 1 面上の丈六村、谷筋の高松村から北の谷筋～Ｍ 1 面所在の原寺村付近の灌漑で、余部の地域はＬ 2 面上の地形を利用しているようである。なお、西除川に対する水利について鋤柄氏は、西除川からの直接取水は、灌漑条件に関して古代から近世を通じて変化が見られないと考えられ、丈六・高松・原寺・北の各村は、西樋筋第一の水元村であることから、特権的な性格を有し、これが中世まで遡る可能性を示唆されている（鋤柄 1999：375 頁）。

明治 22（1889）年に、西･北･原寺･田中新田の四村が合併し丹南郡日置荘村となり、明治 29（1896）年には丹南郡ほか 7 郡が統合され南河内郡となった。日置荘村はその後、昭和 26（1951）年に日置荘町になり、昭和 33（1958）年に堺市に編入され、平成 18（2006）年、政令指定都市移行に伴い区制が施行され堺市東区となり今日に至っている。

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

第１項　発掘調査の方法

今回の太井遺跡、および余部日置荘遺跡の調査は、当センターが2003年８月に定めた『遺跡調査マニュアル【暫定版】』（以下、マニュアルと略記）に則り実施した。

調査は、おおまかに、調査区の設定、現況測量、機械掘削、同出来形測量、人力掘削、同出来形測量、埋め戻しの順である。そして、人力掘削中に、遺構面の平板測量や、調査区・遺構断面等の実測、遺構面や遺構等の写真撮影を行い、最終遺構面は大阪府教育委員会の立会を受け、ヘリコプターによる航空測量を実施した。なお、遺構面の平板測量は縮尺100分の１、断面図・遺構断面図等は20分の１を基本として、それぞれセンター所定のＡ２版実測用紙に実測を行った。写真媒体は、記録用として35㎜白黒・リバーサルフィルムを基本とし、遺構面全景写真ではこれに加えて、６×７白黒フィルムも使用した。なお、台帳用にデジタルカメラも使用した。また、出土遺物には、遺跡名、地区名、層名、遺構名、出土年月日、登録番号などを記したセンター所定のマイラーベースのラベルを添付した。

遺構面などの測量や遺物の取り上げの基本となる地区割りは、世界測地系に準拠し、国土座標軸（第Ⅵ座標系）を基準線とし、大阪府全域を共通の方式で区画できるように、大小６段階の区画を設定している（図４）。第Ⅰ区画は、大阪府の南西端Ｘ＝－192,000ｍ、Ｙ＝－88,000ｍを基準とし、縦６㎞、横８㎞で区画し、縦軸をＡ～Ｏ、横軸を０～８で表示する。今回は、太井遺跡でＦ５、余部日置荘遺跡でＥ５である。第Ⅱ区画は、第Ⅰ区画を縦1.5㎞、横2.0㎞でそれぞれ４区分し、計16区画を設定している。そして、南西端を１とし東へ４までで、あとは西端を５、９、13とし、北東端を16とする。今回は、太井遺跡で４、余部日置荘遺跡で15である。第Ⅲ区画は、第Ⅱ区画を100ｍ単位で縦15、横20に区画したもので、北東端を基点に縦軸がＡ～Ｏ、横軸が１～10となる。今回は、太井遺跡で５Ｄ、余部日置荘遺跡で13Ｍである。第Ⅳ区画は、第Ⅲ区画を10ｍ単位で縦、横各10に区画したもので、縦軸がａ～ｊ、横軸が１～10となる。第Ⅴ区画は、第Ⅳ区画内を５ｍ単位で縦、横各２に区画するもので、北東側をⅠ、北西側をⅡ、南東側をⅢ、南西側をⅣとする。第Ⅵ区画は、第Ⅳ区画内を任意に細分する場合に使用し、北東端を基点とする。遺物の取り上げにおいては、第Ⅳ区画を基準とした。

第２項　整理作業の方法

出土遺物は、速やかに洗浄し、乾燥後、注記を行った。注記は、調査名（カタカナ）・調査区名－登録番号とマニュアルで定められており、太井遺跡の場合「タイ09－１」、余部日置荘遺跡の場合「アマベヒキショウ09－１」で、それぞれこの後ろに登録番号を記した。洗浄、注記が終了した遺物は、実測対象を抽出し、それ以外についてはビニール袋に登録番号ごとにつめ、コンテナ（セキスイＴＲ－22）に収納した。実測対象遺物は、約70点でコンテナ１箱分、未掲載遺物は、コンテナ２箱分である。実測対象遺物は、一部について接合作業を行い、センター所定のＡ３版方眼紙に原寸で実測し、遺物台帳用にデジタルカメラで撮影を行った。なお、銭や瓦など、拓本を採った資料もある。実測後、実測図面のトレースを行い、版下を作成した。最終的に、実測図はＡ２版ファイルに収納した。なお、写真掲

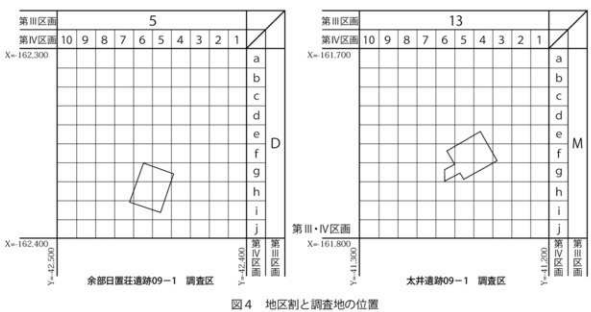


図４　地区割と調査地の位置

載遺物は、写真室にて撮影を行い、紙焼き後、センター所定のＡ４版写真図版台紙に貼りこんだ。

なお、出土遺物については登録台帳を、実測遺物については遺物台帳を、それぞれ作成した。台帳は、ファイルメーカー社のFile Maker Pro ８によるもので、デジタルカメラで撮影した写真をインポートし、登録台帳であれば、出土遺物に添付したラベル同様の情報や、遺物内容（土器、石器などの有無、ピックアップの有無）、遺物の処理（圧縮収納、ピックアップしたのかなど）、収納したコンテナの番号などの情報を、遺物台帳であれば、遺物の種別、器形、時期、残存率などの情報を、それぞれを入力した。

現場で実測した図面は、各内容についての一覧表を添付し、Ａ１版ファイルに収納した。なお、これらの現場作成図面等から、報告書掲載用の遺構図版原図を作成し、トレースを行った。

現場で撮影したフィルムは、デジタルカメラ撮影以外は、現像の後、所定のアルバム類に収納した。デジタルカメラにより撮影した写真は、上記の登録・遺物台帳同様、ファイルメーカー社のFile Maker Pro ８による写真台帳にインポートし、写しこみラベルに記した情報や、他の撮影媒体各のアルバム番号・シート番号・ネガ番号等の情報を入力した。これらの中から、報告書掲載用写真を選択し、写真室にて紙焼きを行い、遺物写真同様、入稿用にセンター所定のＡ４版写真図版台紙に貼りこんだ。

第２節　太井遺跡の調査成果

第１項　既往の調査成果

今回の調査地に隣接する箇所では、過去に当センターの前身組織の一つである財団法人大阪文化財センターにより、阪和道建設に先立ち調査が行われ、報告書も刊行されている（江浦編 1996）。

太井遺跡側では、上記報告書のＫ地区が、今回の調査地の北側に位置する（図５、写真１）。調査は、1986・1988 年度に行われ、全域が西除川の流路変遷に伴い形成された谷底平野とされ（江浦編 1996：202 頁、松山・中村 1987）、同様に谷底平野延長の検出が予想された。また、今回の調査地南側には、段丘崖があり、周辺の地形図などからこの段丘崖が上記阪和道時調査のＪ・Ｋ地区境で、低位段丘と谷底平野の境となる段丘崖（図６）と一連であることがわかり、この予想の蓋然性は高いと判断できた。

なお、上記当該地区の調査では、最下層の砂礫層から遺物がほとんど出土していないことから、西に隣接する日置荘遺跡東端Ａ地区の調査では、この砂礫層を地山扱いとして掘り下げなかった（中村・金光編 1988：７頁）。このため、今回の調査においても、この方針を踏襲した。

近接調査地の成果同様、西除川の谷底平野であった場合、顕著な遺構・遺物の存在は、希薄であると考えられた。しかし、上記Ｊ地区では、旧石器包含層（図５の■印部分）や、縄文土器のまとまった出土（同□印部分）などが見られ、Ｋ地区でも包含層から弥生土器の出土が見られることから、これらの存在にも留意し、調査を行うこととした。

第２項　層序

調査地の現況の標高は、Ｔ．Ｐ .40.2 m前後である。掘削の結果、調査前の予想どおり西除川の谷底平野に位置することが判明した。このため、以下で記すように、現代の作土層、近世頃と考えられる作土層を除去すると、シルト～砂礫層が、全面にわたり露出する状況であった（図７、図版１－１・２）。

調査前の地表面を形成する現代の作土層は、黒褐色粗砂～礫混細砂層（１）で、この下層に質は同様ながら色調がやや淡い、黄灰色粗砂～礫混細砂層（２）が見られた。この（２）下層には、にぶい褐色極粗砂～礫混細砂層（４）が調査区全域に見られた。この（４）上面では、（４）のブロックが混じる黄灰色粗砂～礫混細砂（３）を埋土とする土坑が多数見られた（写真３）。土坑は、円形か隅丸方形気味の平面形で、直径約 1.2 m、深さ約 10 ～ 15 ㎝のものがほとんどである。これらの土坑は、重機による掘削時に確認でき、比較的等間隔に掘削されていることから、一見掘立柱建物を思わせた。しかし、埋土（３）は現代の作土層下部である（２）と類似し、土坑内より出土する遺物も現代のものであることから、土坑の時期が現代であること、さらに土坑断面に柱痕がまったく見られないことから、建物を構成する柱穴の可能性は排除できた。土坑は、平面中央部が盛り上がるドーナツ状を呈するもの、径約 10 ㎝の小規模な落ち込みが土坑底部や壁面に見られるものなどがあり、出土遺物には植木鉢が見られた。土坑の形態から、植栽痕の可能性が考えられ、農芸高校の敷地に当たることからもその蓋然性は高い。美濃部達也氏（1999）や梶原　勝氏（1999）などから、これらは直径 20 ㎝程の浅根性の樹木で、中でも平面形がドーナツ状を呈するものは、樹木を移植する際に根回しを行った痕跡で、根巻を行っていないものと推定できる。なお、阪和道調査時のＫ地区では、近世以降とされる粗砂層の堆積が報告されている（松山・中村 1987:57 頁）が、今回の調査では確認できなかった。図７では表現できていないが、（４）・（５）間の一部では、粗砂層が確認できたが、上記の粗砂層はこれよりも新しいもののようである。

以下の堆積は、場所によりシルト～極細砂層、比較的粗粒な砂層、さらに粗粒な礫層と差があるが、いずれも谷底平野の堆積物である。部分的に残存する、にぶい黄褐色粗砂～極粗砂が少量混じるシルト層（５）上面では、部分的に（４）を埋土とする小溝が見られた（写真４）。（４）は近世頃の作土層と考えられ、小溝の時期は近世以降と考えられる。溝は、ほぼ南北方向だが、座標北より若干西に振る。溝の幅は、約20㎝、深さ約５㎝のものが多い。溝どうしの間隔は、約１ｍである。近世頃に調査区部分で、条里に規制された状態で耕作が行われていた可能性がある。シルト層（５）は部分的に残存するのみで

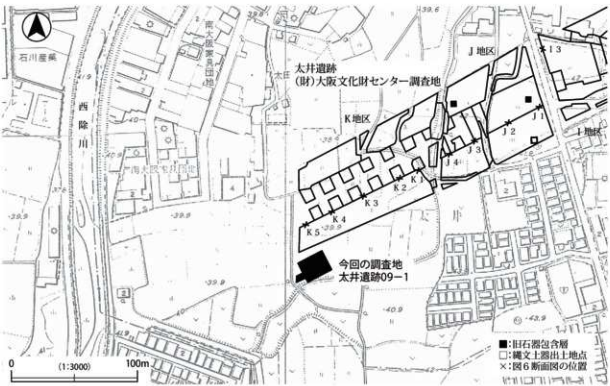


図５　太井遺跡　今回の調査地と近接する既往調査区平面図　大阪府昭和60年2500分の１地域計画図（地形図）使用

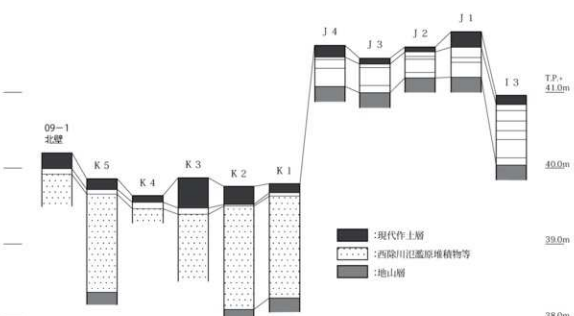


図６　太井遺跡　今回の調査地と近接する既往調査区の断面模式図

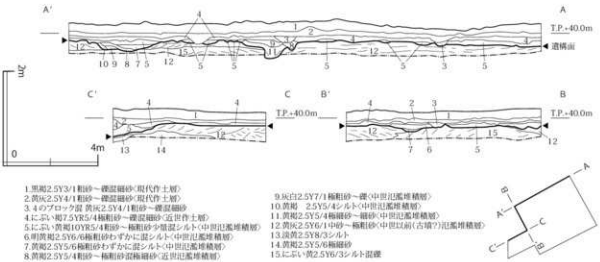


図７　太井遺跡 09 － 1 調査区　断面図

あり、（4）を除去した時点で、調査区北東～中央側、および北西側では、にぶい黄色シルト混礫層（15）が露出し、さらにその周囲では黄灰色中砂～極粗砂層（12）が見られた。（15）の堆積時期については、出土遺物がなく不明であるが、後に検討する。なお、今回の調査で確認し得た（15）の最上部では逆級化傾向で、最上部では 15 ㎝大程の礫も見られた。ただし、ややミクロ的に見ているだけであり、比較的短期間に 15 ㎝大程度の礫が堆積しうるような環境があったのだろう。層厚は過去の調査からも 1 m以上と考えられる。（15）上層には、級化傾向にある黄灰色中砂～極粗砂（12）が堆積しているが、（15）を直接覆う部分以外に、（12）・（15）間にシルトの堆積が見られる部分もあった。これは、礫層（15）が堆積した後、川の本流が移動し、後背湿地化したためと推測できる。（12）と（15）が接する部分では不明瞭で、図７では表現できていない。しかし、調査区西側に見られる、淡黄色シルト層（13）や黄褐色極細砂層（14）が、その段階の堆積物と考えることもできる。これから、（15）から（12）の間には、比較的長期間を見積もる必要があるように思える。（12）もしくは（15）が露出していない部分には、シルトもしくは極細砂を主とする層（5）～（11）が見られ、この層が溝状に堆積している部分もあり、以下で記す遺構面は、このシルト層までを除去した状況である。（12）からシルトを主とする層の最下層と考えられる（11）までの間に、どの程度の時間幅があったのかは明確ではない。ただし、基本的に級化している（12）最上部と（11）とでは、粒度に明瞭な差があり、連続した堆積とは考えにくい。なお、（12）堆積後、（15）同様に、川の本流が移動し、後背湿地化した際に堆積した層を、（12）直上に見られる（5）の一部に含まれる可能性がある。その後、川の本流がやや離れた段階に、（5）～（11）の各層が堆積したのだろう。この（5）～（11）は、後述するように中世（13～14 世紀頃）を含むと考えられる。

第３項　遺構と遺物

１．遺構（図８、図版１－３・４・５）

遺構面としたのは、黄灰色中砂～極粗砂層（12）、もしくはにぶい黄色シルト混礫層（15）上面である（図８）。第２項で記したように、この面でシルト層の落ち込みが溝状に検出された。

調査区の大部分で検出された溝状の落ち込みは、図８では、蛇行する溝といったところだが、図版１－３～５のように、底部は不定形である。埋土は、黄褐色極細砂～細砂で極細砂を主とするが、埋土中

写真３　太井遺跡　現代の土坑群と段丘崖（北から）

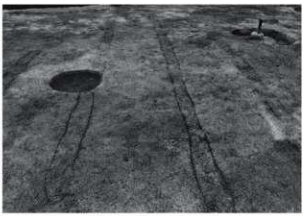


写真４　太井遺跡　近世小溝群（南から）

には粗砂～極粗砂が一部で見られた。ただし、粗砂～極粗砂は、基本的に薄層であり、比較的緩やかに極細砂が堆積している間に、時折粗粒の堆積物が供給される堆積環境であろう。蛇行している要因は、既に高まりを形成していた礫層や砂層の堆積後に、低まっていた部分を埋めるようにシルトの供給があったためと思われる。なお、この蛇行する溝状の落ち込みは、北側から北東側へ向かい流下していたようである。これは、溝状の落ち込みから派生するように、弱い落ち込みが調査区北西側や南側で見られることからも推定できる。

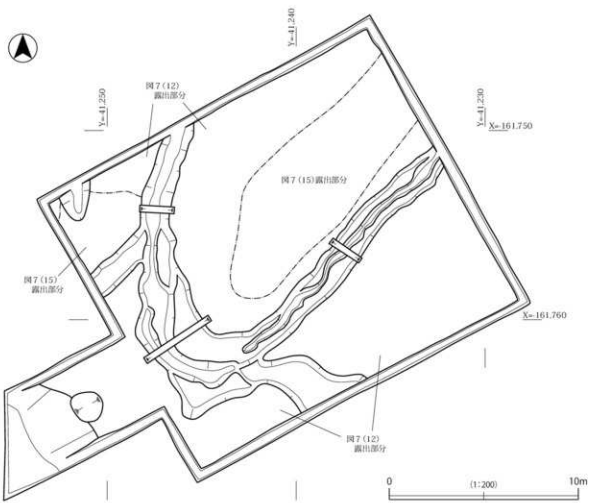


図８　太井遺跡 09－１調査区　遺構面平面図

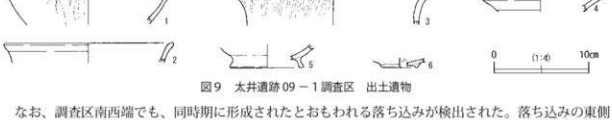


図９　太井遺跡 09 － １調査区　出土遺物

なお、調査区南西端でも、同時期に形成されたとおもわれる落ち込みが検出された。落ち込みの東側の肩を捉えたのみであるが、西側へ低まる地形を捉えているとも考えられる。

２．遺物（図９、図版５－１）

出土遺物はコンテナ１箱弱程度と少なく、実測し得た遺物も図９に記す６点のみである。

１・２は青磁碗。**１**は側溝出土。口縁の約８分の１が残存する破片で、復原口径 17.8 ㎝、現存高 3.9 ㎝。色調は明緑灰（7.5 ＧＹ７／１）で、断面は灰白（Ｎ８／）。胎土は密・精良、焼成は良好・堅緻。外面に鎬蓮弁を施す。龍泉窯系で 13 世紀頃。**２**は図７の（４）出土。口縁の 12 分の１程度のみ残存。復原口径は 17.8 ㎝、現存高 2.0 ㎝。色調はオリーブ灰（５ＧＹ６／１）で、断面は灰白（10 Ｙ８／１）。胎土は密・精良、焼成は良好・堅緻。龍泉窯系で 13 ～ 14 世紀頃か。**３・４**は須恵器。**３**は壺で、図７の（５）出土。口縁の約６分の１が残存し、復原口径 21.8 ㎝、現存高 3.9 ㎝。色調は灰白（7.5 Ｙ７／１）。胎土はやや密、焼成はやや良好。全体的に摩滅が著しい。頸部外面はハケ後回転ナデ。内面は摩滅が著しいが、回転ナデと思われる。**４**は坏身で、側溝出土。全体の約 10％のみ残存。復原受け部径 13.6 ㎝、現存高 2.5 ㎝。色調は灰（Ｎ６／）。胎土は密で、焼成は良好。口縁端部は残存しないが、ごく短いと思われ、ＴＫ 217 型式か。**５**は黒色土器Ａ類椀で、図７の（４）出土。底部約４分の１が残存し、復原脚径 7.4 ㎝、現存高 2.5 ㎝。色調は、外面が黄灰（2.5 Ｙ４／１）、内面が黒（Ｎ２／）。胎土は密で、焼成は良好。脚部貼り付け時のナデは明瞭だが、これ以外の調整は不明瞭。内外面ともナデと思われる。10 世紀頃。**６**は瓦器で、図７の（４）出土。底部約６分の１程度のみ残存。復原底径 3.8 ㎝、現存高 1.0 ㎝。色調はにぶい黄（2.5 Ｙ６／４）であり、黒色を呈さない。胎土は密、焼成はやや良好。内面にはわずかにミガキが見られる。13 世紀前半頃。

図化以外の遺物についてだが、まず第２項で記した（４）上面の土坑群からは、多数の植木鉢が出土している。植木鉢生産は、18 世紀第４四半期から本格化したようだが（堀内 2001）、そこまで遡るとは考えにくく、やはり農芸高校の敷地であったことを考えれば、同校の実習などに伴うものであろう。なお、この土坑や（４）からは、17・18 世紀頃の磁器、染付、中世の青磁片などが出土している。このため、今回図化した（４）出土の中世遺物は混入品ではある。第２項で記した（４）・（５）間の一部に見られた粗砂層からは、時期不明の土師器片などのほか、炉壁と思われる小片も出土している。（５）～（11）までの各層から出土する遺物は、いずれも摩滅した小片だが、瓦器や土師器、須恵器などである。これらの詳細な時期は判断できないが、13 ～ 14 世紀をその堆積時期と捉えることはできる。また、６世紀末～７世紀初頭頃（ＴＫ 43 型式～ＴＫ 209 型式？）と思われる須恵器坏身片の出土も見られた。これを下層から巻き上げられた遺物と考えれば、（12）の時期を示すものかもしれない。

第４項　まとめ

今回の調査では、隣接調査地で見られた旧石器や縄文土器、弥生土器などは確認できなかった。また、各層とも出土遺物が少なく、谷底平野である今回の調査地における各層の堆積時期の詳細をうかがうこ

とは困難だが、少なくとも中世以降の状況を確認することができたといえる。また、これより下層の砂層（図７の 12 など）は、６～７世紀頃に堆積した可能性もある。最下層の 15 ㎝大の礫を含むシルト混礫層（15）の堆積時期は、出土遺物がなく不明だが、最後にこの堆積時期を推定しておく。

まず、この礫層の堆積時期を考える上で、西除川上流に狭山池が存在する点は、注意される。すなわち、下流へまとまった水を送り出す意図をもって作られたダム式のため池である狭山池で、さらに上流からの土砂が、堰き止められていたと考えるのが常識的であり、（15）は狭山池が存在する以前の堆積であった可能性が考えられる。狭山池内の堆積状況は、軟弱な粘土・シルト・砂・砂礫層から構成され、砂～砂礫層は 15 枚以上が確認されている（狭山池地質研究会 1999：198 頁）。中でも最も厚みのあるＳ－ 12 層は最大 2.7 mであり、天野川河口から遠く離れた池の最深部であることから、水深の極浅い状態で河川により直接運搬された砂～砂礫が急速に堆積したと推定されている（同）。ただし、その堆積時期は 1608 年の大改修時とされ（同：202 頁）、ここでの対象時期より新しい。これ以前も、上記のとおり砂礫層は観察できるが、狭山池を通り抜け当遺跡付近まで礫層を堆積せしめた状況は、考えにくい。このことから、狭山池存在以前である蓋然性は高いと判断できる。

狭山池は、発掘調査で見つかった樋の年輪年代測定から、616 年伐採との結果が得られており（光谷 1998）、狭山池が 616 年頃に作られたと推定されている。このことから、礫層の堆積時期が７世紀初頭以前に遡ると推測できる。

これを遡る砂礫層は、今回の調査地に近接するＪ地区池状落ち込み２の７層（にぶい黄橙色砂礫層）が古墳時代とされているが、上下の粘土層に挟まれた比較的薄い層である。このことから、１m以上の厚さがあるここで検討している砂礫層に該当するとは考えにくい。また遺跡内で確認されている、古墳時代の遺物なども含まれる谷埋土にも、同様な礫層は見られない。ただし、時期不明ながら阪和道調査時のＡ～Ｃ地区で検出された谷の南延長では、谷埋土の最下層で 12 ～ 13 ㎝の礫を含む砂礫層が見られる（小谷 2007：６頁）。しかし、この層厚は約 30 ㎝であり、また阪和道調査時の谷では確認されていないようである。このことから、やはり谷埋土に類似する礫層は見出せない。

谷の埋土ではなく、阪和道調査時のＩ地区の谷で検出された流路の基盤層なのだが、地表面から約 3.5 mの深さで、青灰色シルトが切れ、砂混じりの厚い礫層が確認されている（鋤柄編 1990：11 頁）。この深さは、（鋤柄編 1990：12 頁）の図７から、Ｔ．Ｐ .39.4 m程と考えられる。ここで対象としている礫層と最も類似する層を、遺跡内の調査で確認される層から考えれば、この礫層のように思える。なお、この礫層とは必ずしも同一時期の堆積層ではないが、阪和道調査時のＡ～Ｃ地区で検出された谷の基盤砂礫層出土流木の液体シンチレーション ^{14}Ｃ年代測定では、31130 ± 1645 ＢＰ、30460 ± 1515 ＢＰとの値が得られている（柴田ほか 1996）。そう考えれば、これらの礫層がいわゆる地山であると考えられる。なお、図６に示したように阪和道調査時のＫ地区では、旧作土層以下を西除川氾濫原堆積物とされるが（江浦編 1996：165 頁）、同報告書図版Ⅲ－ 14 を見ると今回の調査地と同様な掘削深度で、同様な砂礫層が露出しているように見える。そうであれば、図６で西除川氾濫原堆積物として一括されている層の最上部以下は、地山相当となる。もし、この判断が妥当であれば、礫層は３万年前頃に堆積し、１万年前以降に西除川による下刻、侵食などで露出し、その後砂層、シルト層などが中世までに堆積し、近世になりようやく結局的な土地への働きかけが行われるようになるといった変遷が考えられる。

第３節　余部日置荘遺跡の調査成果

第１項　既往の調査成果

今回の調査地に隣接する箇所では、過去に当センターの前身組織の一つである財団法人大阪文化財センターにより、阪和道建設に先立ち調査が行われ、報告書も刊行されている（江浦編 1995）。

余部日置荘遺跡側では、上記報告書のＪ地区が、今回の調査地の北側に位置する（図 10）。調査は、1987・1988・1990 年度に行われ、調査区西端で谷状地形が検出された（図 11：Ｊ３地点）他、６～８世紀の遺物を含む谷（谷Ｊ－２）（図 11：Ｊ１地点）、13 世紀頃の掘立柱建物などが検出された。掘立柱建物のうち、建物Ｊ－42（図 10 の□印部分）は、北側と西側に庇を有するもので、中世屋敷地の区画 16 の縁部に位置する（市本 1995、小野 1989、鋤柄・市本・本間 1988）。基本的に、遺構の密度は濃くない地点ではあるが、上記の区画 16 では、鋳造関連の遺構・遺物が見られることが報告されている（図 10 の○印部分）。これらから、谷状地形の延長や、13 世紀代を中心とした遺構の検出が予想された。この他、鋳造関連遺構・遺物の存在や区画 16 関連遺構にも注意し、調査を行うこととした。

なお、今回の調査地や阪和道調査時Ｋ地区北側ではＨＫＳ－19 調査（岩宮 2004）が、これと位置的に重複しつつ、南海高野線沿線付近等ではＨＫＳ－20 調査（柿沼 2005）が行われている（図 10）。ＨＫＳ－19 調査では、Ｋ地区で確認された包含層（江浦編 1996：347 頁のⅣ層のことと思われる）は見られず、床土直下が地山層のようで、遺構、遺物とも確認されていない。ＨＫＳ－20 調査でも、今回の調査地に近接する箇所では遺物の出土は見られない。しかし、３・11 地点（図 10）で地山面を切り込む落ち込みが確認されている。なお、１地点は全て埋土とされており様相は不明であり、Ｊ地区西端の谷（谷⑧）西側の様相は不明である。２地点では、Ｋ地区に類似する層序のようである。これ以外に比較的今回の調査地に近い、南海高野線沿線の 25・24・12 なども盛土以前の耕作土もしくは床土を除去した段階で地山が露出するようであった。

また、今回の調査地付近における遺物分布については、鋤柄氏の分析（鋤柄 1995 b）があり、これによれば、今回の調査地付近では、８世紀以前の遺物、黒色土器椀、白磁四耳壺・合子・梅瓶、瀬戸壺、褐釉陶器、瀬戸内東部系須恵器、同安窯系・龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、鋳型が出土していることが知られ、これらの遺物にも注意し、調査を行うこととした。

第２項　層序

調査地の現況の標高は、Ｔ．Ｐ .47.8 ～ 47.9 ｍで、若干の起伏が見られる程度であった。しかし、掘削の結果、地山面では調査地南西側が低く、北東側が高いことがわかった。このため、北東側では、重機により現代の作土層を除去した段階で、地山層が露出する状況であった（図 12、図版２－１・２）。

重機により除去した現代の作土層は、大部分が暗灰黄色礫混極細砂層（４）で、図 12 では表現できていないが、この下層に黄灰色粗砂混シルト層が一部で見られた。

ただし、調査地北側、地表面に弧を描くような畦畔が見られた箇所より北側部分については、現代の作土層（３）の上層に、暗灰黄色シルト～極細砂ブロック混粗砂～礫層（１）とオリーブ褐色粗砂～細礫層（２）が見られた。（３）と（４）は、若干の差異があるが、同一層と考えられる。当該部分の機械掘削は、（１）を除去した段階で過去の調査で報告がない砂礫層（２）が露出したため、慎重を期しこの段階で機械掘削を終了した。しかし、人力掘削の結果、砂層はさほど古い時期の堆積ではないこと

が判明した。どうやら現代のある段階に、弧を描くような畦畔の北と南で見られた段差を埋め、調査前までの景観が形成されたようである。この調査地北側部分は、(2)を除去した段階で畝溝が検出された。畝溝は北から東へ約66度振る方向で、南側の溝は弱く弧を描く。調査地内では4条がほぼ平行して確認できた。それぞれの溝は、幅40㎝、深さ10㎝程で、溝の肩どうしの間隔は、40～50㎝である。また、

図10　余部日置荘遺跡　今回の調査区と近接する既往調査区平面図　大阪府昭和60年2500分の1地域計画図（地形図）使用

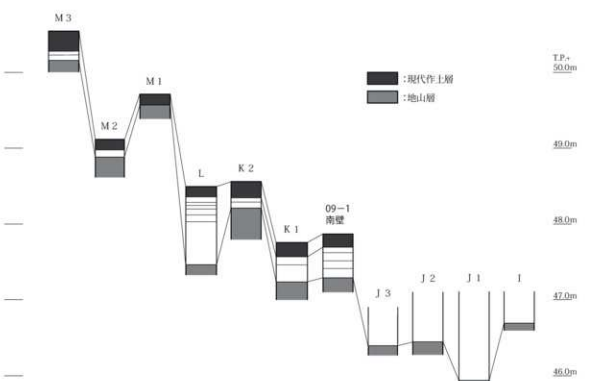


図11　余部日置荘遺跡　今回の調査地と近接する既往調査区の断面模式図

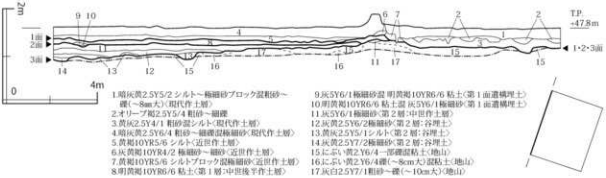


図 12　余部日置荘遺跡 09 －１調査区　断面図

これより南側の、現地表面で畦畔が見られた部分（写真２）付近では、畦畔に沿うように弧を描く溝が検出された。溝は幅 30 ㎝、深さ５㎝程で、畦畔際の排水溝だろう。また、この畝溝を切り近代以降の井戸が検出された。なお、この部分では、作土層（３）を除去した段階で、地山層がほぼ露出した。

これら作土層直下で、調査区北側を除き見られたのが、近世の作土層である、第０層の黄褐色シルト層（５）で、上層からの鉄分の沈着を受け赤味を帯びた層であった。この第０層を除去した面を第１面とした。第１面を構成する第１層の明黄褐色粘土層（８）は、調査区の南半で確認でき、マンガン斑が顕著であった。この第１層を除去した面を第２面とした。なお、上記の第０層における鉄分の沈着や第１層におけるマンガン斑は、いずれも（４）を作土としている段階に形成されたものだろう。さて、第２層は、調査区南半の谷地形部分では分厚く確認できた。上層から、灰色極細砂層（11）、灰黄色極細砂層（12）、灰黄色極細砂層（13）で、いずれも質は類似するため第２層と一括したが、暗色度合いの差異により細分した。これらを除去した面は、地山層上面でこれを第３面とした。なお、地山層も場所により異なり、灰白色粗砂～礫層部分（17）と、にぶい黄色礫混粘土層部分（16）、（16）と同様ながら礫の混じりが少ない、にぶい黄色一部礫混粘土層部分（15）が見られた。なお、（17）には 10 ㎝以上の礫が見られる部分もあった。断面観察から、（17）のほうが古い地山層と判断できた。

第３項　遺構と遺物

調査では、３面の遺構面を調査した。

１．第１面（図 13、図版２－３）

畦畔、溝、土坑などが検出された。この段階で、調査区北東側は、地山が露出している。遺構面は、北東側が高く、南西側が低い。標高は、Ｔ．Ｐ .47.5 ～ 47.6 mである。

ａ．遺構と遺構出土遺物

１畦畔　調査前の地表面で弧を描く畦畔がみられた箇所（写真２）のほぼ直下で検出された（図 12）。畦畔直上には、近世作土層が見られ（図 12 －６・７）、さらに現代作土層が、直に覆う部分もあることから、頂部や肩部が削りだされている部分がある。ただし、畦畔がすべて削りだされているのではなく、当面に存在したことは確実である。

２土坑（図 15･16、図版２－４･６－１）　上述の１畦畔を切る。長径 1.75 m、短径 1.65 m、深さ 55 ㎝。埋土は黄灰色のシルト～細砂で、地山ブロックや地山起源の礫が混じり、下部には特に地山ブロックが多く見られた。第１層から地山層までが混在した状況で、明らかに第０層と判断できるブロック等は見られなかった。第１面の範囲内で人為的に埋め戻されたのだろう。埋土の最下部に水が溜まっていたと

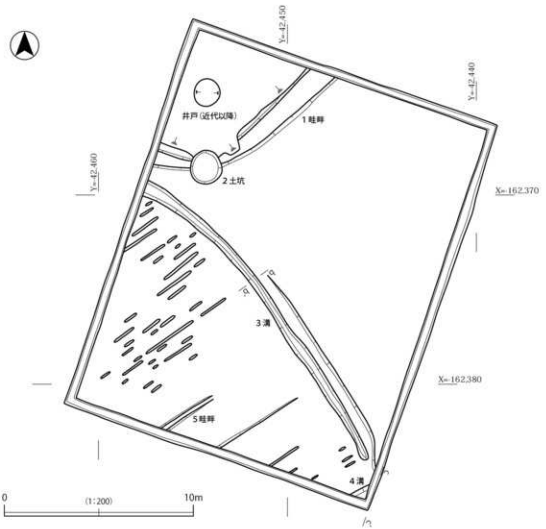


図13　余部日置荘遺跡 09 － 1 調査区　第 1 面平面図

推測できるようなシルト層は、明瞭には確認できなかった。掘削深度が浅いことからも、井戸とは考えにくく、機能時に水成層が堆積したような層が見られないことから、水溜とも積極的には評価できず、土坑の性格については不明である。

出土遺物は、瓦器片 3 点、土師器片 8 点で、土師器には羽釜を含む。このうち図化し得たのは 1 点である（図 16）。**19** は瓦器椀。口縁部の約 12 分の 1 が残存し、復原口径 12.4 ㎝、現存高 1.8 ㎝。色調は灰（N 5 ／）、胎土は密で、焼成はやや良好。外面、口縁部はヨコナデで、以下はナデか。内面にはわずかにミガキが残る。13 世紀後半。これ以外の出土遺物については、詳細な時期をうかがえない。しかし、上述の 1 畦畔を切ることや、後述するように第 1 面の時期がこの遺物が示す時期より新しいことからは、第 1 層からの混入と判断できる。遺構の正確な時期は不明ながら、切り合いなどからは近世に程近い時期と考えられる。

3 溝（図 15・16、図版 6 － 1・7 － 1）　上述のように、調査区南西側は相対的に低くなっており、弱い段差の南西側で検出された。幅は 0.4 ～ 0.8 m で北西端がもっとも幅広である。深さは 5 ㎝程度で、埋土は灰黄色シルトである。この埋土は第 0 層に類似するが、後述する小溝群の埋土とは様相を若干異にし、上層より掘削された下面遺構ではなく、当面に伴う遺構と考えられる。

出土遺物は、瓦器片 6 点、須恵器片 5 点、土師器片 14 点、瓦片 1 点、円筒埴輪片 1 点、炉壁片 1 点

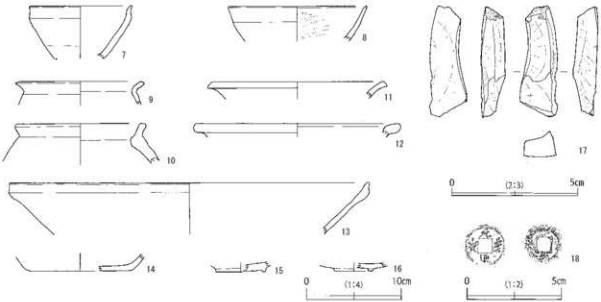


図 14　余部日置荘遺跡 09 － 1 調査区　第０層出土遺物

で、図化し得た遺物は２点である（図 16）。**20** は須恵器片口鉢。口縁部の約 12 分の 1 が残存し、復原口径 27.6 ㎝、現存高 4.0 ㎝。色調は灰白（Ｎ７／）。胎土は密で、焼成はやや良好。内外面とも回転ナデで、口縁端部は弱く上下に拡張する。東播系須恵器で、12 世紀末～ 13 世紀初頭頃。**21** は円筒埴輪で、今回の調査で出土した唯一の円筒埴輪である。現存高は 8.5 ㎝で、器厚は 2.5 ㎝。色調は明黄褐（10 Ｙ Ｒ ６／６）。胎土は密で、焼成はやや良好。全体的に摩滅が著しく、外面にわずかにタテハケが見られる程度である。内面の調整は摩滅のため不明だが、内外面とも接合痕が残る。いわゆる日置荘西町窯系埴輪などとされるものである。これ以外に、炉壁の出土も見られた（図版８－ **82**）。緩やかに内面が彎曲し、黒色変化が見られ黒色ガラス質滓らしきものが付着しており、鋳造炉の下部に近い部分の破片と思われる。最大幅 4.0 ㎝、最大長 3.8 ㎝、最大厚 2.4 ㎝。これらは、遺構の時期を示すものではなく、いずれも第１層以下からの混入と思われる。図化し得なかった遺物のうち、瓦片は凸面の縄目が残存するのみで、凹面は残存しない。瓦器片は内面にミガキが観察でき、13 世紀前半頃と考えられる。これ以外については、小片のため詳細時期は不明である。

４溝（図 15）　調査区南東端で検出された。南東肩は調査区外だが、断面からは調査区南東端に程近い箇所に存在すると推測できる。深さは 10 ㎝程度で、埋土は上部が黄褐色シルト、下部が明黄褐色粘土であるが、いずれも類似する。色調はやや異なるが、３溝の埋土とも似る。出土遺物はない。

５畦畔　調査区南西部で検出された。上述の４溝や後述する小溝群と同様な方位で、北から 58 度程東へ傾く。なお、遺構番号を付していないが、５畦畔の東側では弱い段差が検出されている。いずれも北東へ向かい不明瞭になり、３溝との関連は不明である。しかし、３溝南側に畦畔が存在した可能性も考えられる。３溝の南側は、南東端が高く、西方向に向かい下がる地形である。また、中でも南西部が最も低い。第１面の直上層は、水成層ではないため多少の削平を受けているとは思われるが、地形の概要は妥当であろう。そして、その地形を考慮し、５畦畔が築かれていたのだろう。

小溝群（図版２－５）　３溝より南西側では、多数の小溝が検出された。いずれも北東－南西方向で、幅 10 ～ 15 ㎝、深さ 5 ㎝程度である。埋土は、第０層の黄褐色シルト層であり、第１面に伴う遺構ではなく、上層より掘削された下面遺構である。いずれからも出土遺物はない。

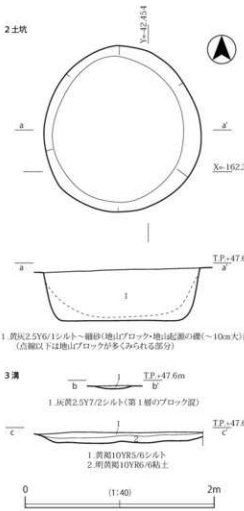


図15　余部日置荘遺跡 09－1調査区　第1面遺構平・断面図

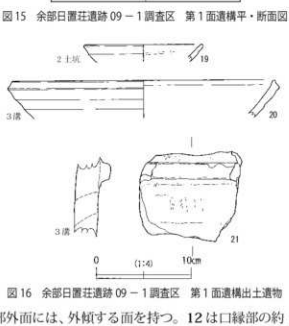


図16　余部日置荘遺跡 09－1調査区　第1面遺構出土遺物

b．第0層出土遺物（図14、図版5－2・8－5）

第0層からは、陶器、瓦質土器、瓦器、黒色土器、須恵器、土師器、鋳造関連と思われる焼土塊、銭、サヌカイト剥片などが出土している。これらのうち、図化し得たのは12点であるが、10と13は側溝出土である。

7は陶器、天目茶碗。全体の約30％が残存。色調は釉薬部分が黒褐（10ＹＲ3／1）で、これ以外の部分がにぶい褐（7.5ＹＲ5／4）。胎土は密・精良で、焼成は良好。一点破線部分より上位に釉が施され、底部付近には鉄錆の化粧掛けが施される。高台は残存しないが、高台脇のケズリが明瞭に確認できる。体部は比較的直線的で、口縁部が明瞭に屈曲し上方に伸び、端部がつまみ出される。16世紀中頃以降。**8**は黒色土器Ａ類椀。口縁部の約8分の1が残存し、復原口径14.6㎝、現存高3.7㎝。外面の色調は浅黄橙（7.5ＹＲ8／4）。胎土は密で、焼成は良好。外面、口縁部はヨコナデで、体部はナデか。内面にはミガキが見られるが、単位は不明瞭である。10世紀頃。**9**～**12**は土師器でいずれも甕。**9**は口縁部の約12分の1が残存し、復原口径12.8㎝、現存高2.4㎝。色調は、明黄褐（10ＹＲ6／6）。胎土はやや密で、焼成は良好。口縁部は内外面ともヨコナデで、体部外面は摩滅のため調整不明、内面はナデか。口縁端部には、やや外傾気味の面を持つ。**10**は口縁の約6分の1が残存。復原口径13.5㎝、現存高4.2㎝。色調は灰白（2.5Ｙ8／2）。胎土はやや密で、焼成は良好。口縁部は内外面ともヨコナデで、体部外面は摩滅のため調整不明ながらナデか。内面もナデと思われる。**11**は口縁部の約12分の1が残存し、復原口径18.0㎝、現存高1.8㎝。色調は明褐（7.5ＹＲ5／6）。胎土はやや密で、焼成はやや良好。摩滅のため内外面とも調整不明。口縁端部外面には、外傾する面を持つ。**12**は口縁部の約12分の1が残存し、復原口径21.4㎝、現存高1.4㎝。色調は橙（7.5ＹＲ6／6）。胎土はやや粗で、焼成はやや良好。摩滅のため内外面とも調整不明。いずれも、平安時代前期頃だろう。**13**は須恵器片口鉢。口縁部の約12分の1が残存し、復原口径38.0㎝、現存高5.4㎝だが、小片のため口径に問題があると思われる。色調は灰白（Ｎ7／）で、口縁外面のみ灰（Ｎ6／）。胎土は密で、焼成はやや良好。内外面とも回転ナデで、内面はのちナデ。口縁端部は上

方に拡張する。東播系須恵器で、13 世紀頃。**14** は土師器坏か。底部の約６分の１が残存し、復原底径 10.0 ㎝、現存高 1.8 ㎝。色調は浅黄（2.5 Ｙ８／３）。胎土は密で、焼成は良好。内外面とも剥離、摩滅のため調整不明。**15** は瀬戸・美濃系陶器。底部の約４分の１が残存する。復原底径 5.0 ㎝、現存高 1.0 ㎝。色調は浅黄（7.5 Ｙ７／３）。胎土は密で、焼成は良好。内外面とも釉を施すが、高台部分は露胎で、高台から底部にかけての屈曲部分に、うっすらと釉が確認できる。底部には糸切り痕と思われる痕跡が確認される。15 世紀頃。**16** は瓦器椀。底部の約４分の１が残存し、復原底径 4.0 ㎝、現存高 0.9 ㎝。色調はにぶい黄（2.5 Ｙ６／４）。胎土は密で、焼成はやや良好。内外面とも摩滅のため調整不明瞭だが、外面はナデで、高台貼り付け時のヨコナデは比較的明瞭である。内面はミガキと思われるが、単位は確認できない。12 世紀末～ 13 世紀初頭頃。**17** はサヌカイト剥片。図面上端部には、自然面が残る。弥生時代か。**18** は銭、元豊通寶。1078 年初鋳の北宋銭で、中世渡来銭の中でも出土点数は多いが、16 世紀後半～ 17 世紀前半にかけて多数の模鋳銭もある（永井 1996：125 頁）。今回の出土品は、その特徴が堺環濠都市遺跡ＳＫＴ 448 －３例（同：31 頁）と類似することから、後者の模鋳銭と考えられる。

ｃ．時期

第０層から出土する遺物には、古い時期のものも含むが、16 世紀後半～ 17 世紀前半を最新とする。第１面遺構出土遺物には、13 世紀を含むが、これらは後述する第１層からの混入と考えられる。その後述する第１層には、13 世紀を中心に、14 世紀までの遺物が含まれる。今回の調査地は、15 ～ 16 世紀中頃を特徴づける瓦器火鉢等の分布域から離れており（鋤柄 1995 ｂ）、今回の調査でもこれが追認できた結果、当該期の様相が不明である。これらから、第１面の時期は、16 世紀後半頃と考えられ、15 世紀を含む可能性もある。

２．第２面（図 17、図版２－６）

畦畔が検出された。遺構面は、第１面同様で、北東側が高く、南西側が低い。標高は、Ｔ．Ｐ .47.4 ～ 47.6 ｍである。また、第１面で既に地山が露出していた調査区北東側から南西側に向かい、弱い段差が確認できた。これは､以下で記す第３面で明瞭に検出された谷状地形を反映しているものであろう。

ａ．遺構

６畦畔　調査前の地表面と第１面で見られた、弧を描く畦畔の直下で検出された。畦畔の北肩は、削平されている。

ｂ．第１層出土遺物（図 18、図版６－１・７－３・８）

第１層からは、瓦器、須恵器、土師器、瓦、石器、鋳造関連遺物などが出土している。これらのうち、図化し得たのが 23 点である。

22 ～ **25** は瓦器。22 は皿。全体の約４分の１が残存し、復原口径 7.8 ㎝、現存高 1.2 ㎝。色調は、外面が灰白（５Ｙ７／２）、内面が灰黄（2.5 Ｙ７／２）。胎土は密で、焼成はやや良好。外面、口縁部はヨコナデで、以下はナデ、内面は摩滅のため調整不明。**23** は椀か。口縁部の約８分の１が残存し、復原口径 12.0 ㎝、現存高 1.5 ㎝。色調は黒（Ｎ２／）。胎土は密で、焼成はやや良好。口縁部は内外面ともヨコナデ、以下外面はナデと思われる。内面は摩滅のため調整不明。**24** は椀。約８分の１が残存し、復原口径 14.0 ㎝、現存高 2.9 ㎝。色調は灰（Ｎ６／）。胎土は密で、焼成は良好。外面、口縁部はヨコナデで、以下はミガキ。内面はナデのちミガキ。口縁が歪んでおり、復原口径は正確ではない。**25** は椀。口縁部の約 16 分の１が残存し､復原口径 16.0 ㎝､現存高 3.1 ㎝。色調は灰（Ｎ６／）。胎土は密で､焼成は良好。

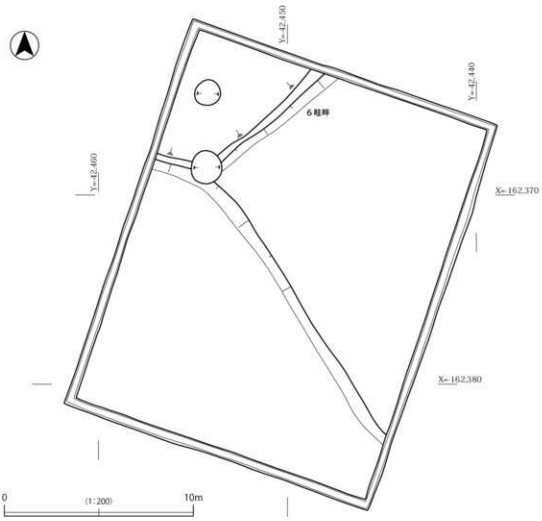


図17　余部日置荘遺跡09－1調査区　第2面平面図

内外面とも密にミガキが施される。**25** は、口縁部外面のヨコナデの幅も狭く、ミガキも密であり、12世紀後半頃だろう。これ以外は、12～13世紀代と思われる。**26・27** は土師器。**26** は皿。全体の約6分の1が残存し、復原口径 9.4 ㎝、現存高 0.7 ㎝。色調は灰白（5Y7／1）。胎土は密で、焼成は良好。口縁部は内外面ともヨコナデで、これ以外はナデ。**27** は椀か。口縁部の約10分の1が残存し、復原口径 13.6 ㎝、現存高 1.9 ㎝。色調はにぶい橙（7.5YR7／3）。胎土は密で、焼成は良好。内外面とも摩滅のため調整不明。いずれも13世紀頃だろう。**28・29** は青磁。**28** は小皿で、口縁部の約12分の1が残存し、復原口径 12.0 ㎝、現存高 2.0 ㎝。色調は、釉薬部分がオリーブ灰（10Y6／2）、露胎部分が灰白（10Y8／1）。胎土は、密・精良で、焼成は良好・堅緻。口縁端部外面に、若干平坦面がある。**29** は碗。口縁部の約12分の1が残存し、復原口径 15.2 ㎝、現存高 4.0 ㎝。色調は釉薬部分が灰白（7.5Y7／2）、露胎部分が灰白（10Y8／1）。胎土は、密・精良で、焼成は良好・堅緻。いずれも同安窯産で、**28** が13世紀後半、**29** が13世紀代だろう。**30・31** は須恵器片口鉢。**30** は口縁の約24分の1が残存し、復原口径 29.4 ㎝、現存高 4.6 ㎝。色調は灰（N6／）で、口縁部は灰（N4／）。胎土はやや密で、焼成はやや良好。内外面とも回転ナデ。**31** は片口部分の破片。色調は灰白（N7／）。胎土は密で、焼成は良好。いずれも13世紀頃。**32** は土師器羽釜。全体の5％程度のみ残存し、現存高は 2.6 ㎝。色調はにぶい黄橙（10YR6／4）。胎土はやや密で、焼成は良好。内外面ともナデ。**33** は黒色土

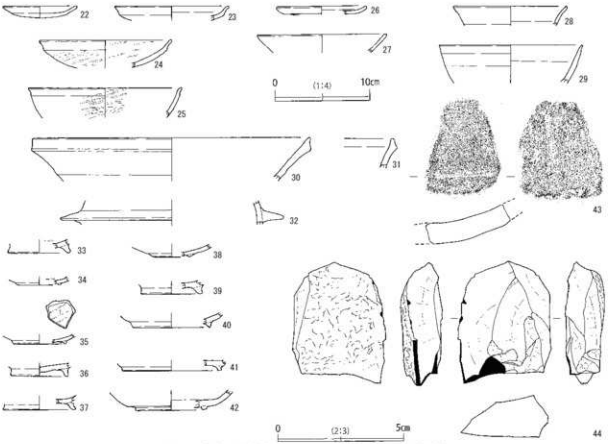


図 18　余部日置荘遺跡 09 － 1 調査区　第 1 層出土遺物

器A類椀。高台部の約５分の１が残存し、復原底径 6.4 ㎝、現存高 1.4 ㎝。色調は、底部外面が橙（7.5 Ｙ R 7 ／ 6）、内面が暗灰（Ｎ３／）。胎土は密で、焼成は良好。高台部分のヨコナデは観察できるが、内面のミガキは不明瞭である。**34 ～ 38** は瓦器椀。**34** は底部の約６分の１が残存し、復原底径 4.4 ㎝、現存高 0.9 ㎝。色調は、外面が浅黄（2.5 Ｙ 7 ／ 3）、内面が灰（Ｎ５／）。胎土はやや密で、焼成はやや良好。外面は摩滅著しく調整不明瞭ながら、ナデと思われる。内面はわずかにミガキが見られる。**35** は底部の約６分の１が残存し、復原底径 5.4 ㎝、現存高 1.0 ㎝。色調はオリーブ黒（10 Ｙ 3 ／ 1）。胎土は密で、焼成は良好。外面、高台部分がヨコナデで、これ以外はナデ。内面は暗文が見られる。**36** は底部の約４分の１が残存し、復原底径 5.8 ㎝、現存高 1.3 ㎝。色調は灰（Ｎ５／）。胎土はやや密で、焼成はやや良好。外面は、高台部分がヨコナデで、底部はナデ。内面は、摩滅のため調整不明。**37** は高台部の約６分の１が残存し、復原底径 7.4 ㎝、現存高 1.5 ㎝。色調は外面が灰（Ｎ５／）、内面が灰黄（2.5 Ｙ 7 ／ 2）。胎土は密で、焼成はやや軟。外面は高台部貼り付け時のヨコナデが明瞭で、底部はナデ。内面はミガキと思われるが、摩滅のため調整不明である。**38** は底部の約５分の１が残存し、復原底径 4.0 ㎝、現存高 1.3 ㎝。色調は黒（Ｎ２／）で、断面は灰黄（2.5 Ｙ 7 ／ 2）。胎土は密で、焼成はやや良好。高台貼り付け時のヨコナデ以外、内外面とも摩滅のため調整不明。これらは、12 世紀後半～ 13 世紀中頃であろう。**39・40** は土師器。**39** は底部の約３分の１が残存し、復原底径 6.0 ㎝、現存高 1.4 ㎝。色調はにぶい黄橙（10 Ｙ R 7 ／ 4）。胎土は密で１㎜以下の石英が見られ、焼成は良好。内外面ともナデ。**40** は高台部の約６分の１が残存し、復原底径 8.0 ㎝、現存高 1.5 ㎝。色調はにぶい黄褐（10 Ｙ R 4 ／ 3）。胎土は密で１㎜以下の石英、長石、雲母が見られ、焼成は良好。外面高台部分のヨコナデは比較的明瞭だが、これ以外の調整は摩滅のため不明。**41・42** は須恵器。**41** は底部の約 12 分の１が残存し、

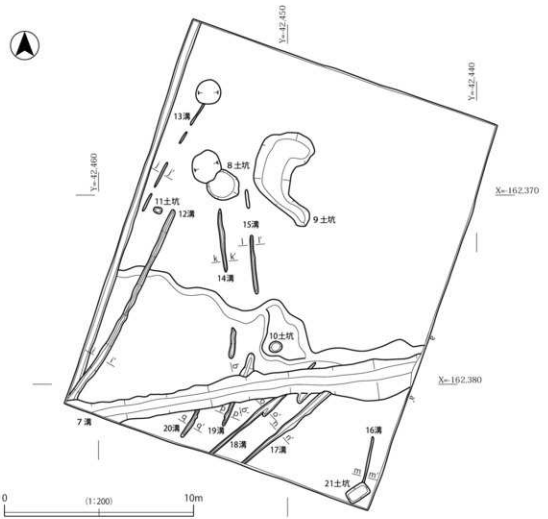


図19　余部日置荘遺跡09－1調査区　第3面平面図

復原底径10.4㎝、現存高1.1㎝。色調は灰白（5Y7／1）。胎土は密で、焼成は良好。外面は、高台貼り付け時のヨコナデが明瞭で、底部側はナデ。内面はナデ。**42**は底部の約12分の1が残存し、復原底径7.6㎝、現存高2.1㎝。色調は灰（N6／）。胎土は密で、焼成は良好。内外面とも体部は回転ナデで、外面高台際はケズリか。内面見込み部分はナデ。**43**は平瓦。最大幅9.0㎝、最大長10.9㎝、最大厚2.2㎝。色調は灰（N4／）。胎土はやや粗で、焼成はやや良好。凹面に布目、凸面に縄目が残るが、凸面の調整は不明瞭である。**44**はサヌカイト石核。背面には自然面が残る。風化が著しいが、典型的な瀬戸内技法などで得られるものとは異なり、旧石器と断定はできないが、縄文時代までには収まるものだろう。

この他、鋳造関連遺物が見られる（図版8）。**63**～**80**は炉壁片。いずれも内面が発泡し、黒色ガラス質滓が付着しているのも見受けられるので、鋳造炉に伴う破片と考えられる。錆が付着するものが多く、鉄の鋳造炉に伴うものとも考えられる。なお、**63**は最大幅4.5㎝、最大長6.0㎝、最大厚3.4㎝である。**81**は羽口か。内外面とも破損している可能性があるが、内面のわずかに生きていると考えられる部分の内径が約4.4㎝に復原でき、鋳造用の羽口とも考えられる。最大幅・最大長5.0㎝、最大厚3.1㎝。**83**は鋳型か。胎土は密。写真左側の一部は灰色を呈し、還元状態になる被熱痕跡と考えられる。また、斜め方向の擦痕が見られ、挽型痕跡の可能性がある。最大幅2.6㎝、最大長5.1㎝、最大厚1.9㎝。

ｃ．時期

以上の第１層出土遺物は、13 世紀を中心とする。ただし、図化し得なかった資料中に、14 世紀に下る可能性のある瓦器椀が含まれる。また、後述する第３面検出遺構のうち、第２層上部に似る埋土を有するものには 13 世紀の遺物が含まれる。これらから第２面の時期は、13 ～ 14 世紀頃と考えられる。

なお、第１層からは、まとまって鋳造関連遺物が出土している。本節第１項でも記したように、近接する阪和道調査地の区画 16 周辺では、鋳造遺構（土坑Ｉ－ 548）が検出され、炉の土坑掘方出土の瓦器椀から 13 世紀後半～ 14 世紀とされている（小野 1989：105 頁）。また、周辺調査でも、13 世紀を中心に鋳物師の活動が報告されている（寺川ほか 1996：139 － 141 頁、小浜ほか 2002：212 頁など）。これらから、第１層に含まれる土器類と鋳造関連遺物とが同一層内で混在することに矛盾はないと考える。

３．第３面（図 19、図版３－１）

溝、轍、土坑などが検出された。第３面の地山面は、第２面まで同様に、北東側が高く、南西側が低い。標高は、Ｔ．Ｐ .47.25 ～ 47.6 ｍである。

ａ．遺構と遺構出土遺物

７溝（図 20・23、図版４－１・２）　調査区南側で東北東－西南西方向に検出された。幅１～ 1.5 ｍ、検出面からの深さ 70 ㎝前後の直線的な溝である。溝底は、今回の調査区内では明瞭な傾斜は見られない。埋土は、最下部にシルトブロック混極粗砂～礫層（11）が、溝中央部分の断面で薄く見られ、その上層に極粗砂～礫混粘土層（９）が堆積している。（９）には、砂礫が多く混じる。この上層には、一部で粗砂混シルト層（10）が見られるものの、多くの部分では暗色を呈する粘土層（８）が堆積している。これより上層は、シルト～極細砂層を主とし、層間に薄い砂層を挟む。この中でも、粗粒の砂礫は下部に多い（６・７）。これより上部においても砂礫は混じるが、粒度はやや細かい。すなわち大きくは、シルト～極細砂層を主とし、層間に薄い砂層を挟み、下部は砂礫層と捉えることができる。

規模に比し、遺物量は少なく、須恵器５片、土師器３片が出土した程度であった。このうち図化し得たのが、４点である（図 23）。**59** は須恵器坏蓋。現存高は 2.2 ㎝。色調は灰（Ｎ５／）。胎土は密で、焼成は良好。外面は大部分が回転ケズリ、内面は回転ナデである。ＭＴ 85 型式、６世紀後半頃か。**60** は須恵器坏身。受け部端が残存しない。口縁部の約 12 分の１が残存し、復原口径 10.3 ㎝、現存高 2.8 ㎝。色調は灰（Ｎ４／）。胎土は密で、焼成は良好。内外面とも回転ナデ。ＴＫ 10 型式、６世紀中頃か。**61** は土師器坏か。高台部の約５分の１が残存し、復原底径 11.2 ㎝、現存高 2.1 ㎝。色調は明褐（7.5 ＹＲ５／６）。胎土は密で、焼成は良好。奈良時代か。**62** は須恵器把手。色調は灰（Ｎ６／）。胎土は密で、１㎜大の石英、長石が見られ、焼成は良好。内外面ともナデ。

以上からは、埋没時期を８世紀頃と考えることができる。しかし、今回の調査地北西側の阪和道調査時のＫ地区では、この延長と考えられる溝Ｋ－１が検出されており（図 24）、平安時代（９世紀後半頃）とされている。このことから、埋没時期は９世紀後半頃と考えられる。

轍（12～20 溝）（図版 21、図版３－２～３－５）　７溝以外の、幅 10 ～ 15 ㎝程度の小溝（12 ～ 20 溝）は、いずれも轍と考えられる。轍の多くは、検出面からの深さが約 10 ㎝だが、12 溝のみ深さ約 20 ㎝と深いものであった。12・13 溝、17・18 溝、19・20 溝が、それぞれ対となり、16 溝は調査区外東側に、対となる同様の溝が存在すると推測される。なお、14 溝と 20 溝、15 溝と 19 溝は、一連の轍の可能性もある。それぞれの平行する溝の間隔は、約 1.5 ｍである。出土遺物は、12・17・18・20 溝から

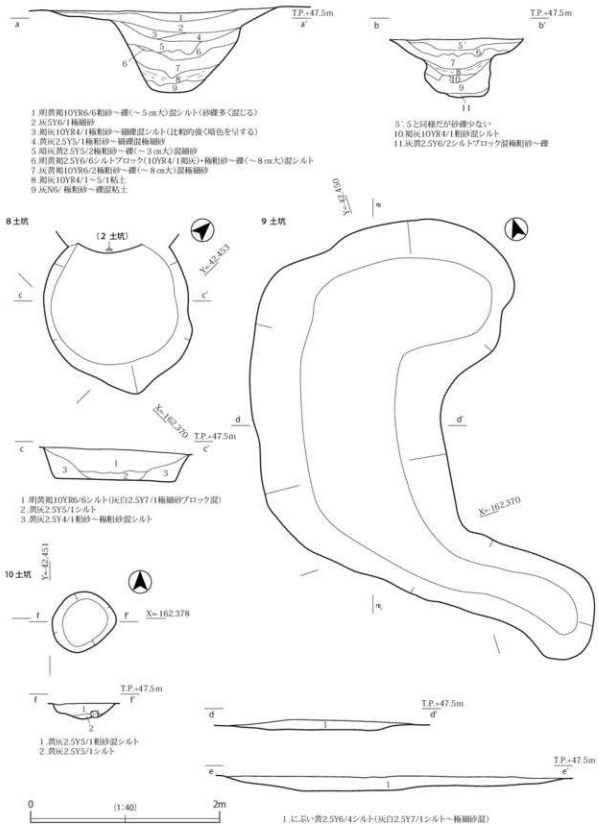


図 20　余部日置荘遺跡 09 － 1 調査区　第 3 面遺構平・断面図（1）

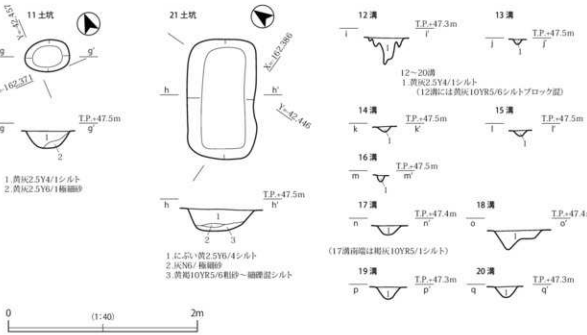


図 21　余部日置荘遺跡 09－１調査区　第３面遺構平・断面図（２）

見られたが、いずれも小片で図化し得なかった。12・17・20 溝からは、それぞれ１点ずつ土師器片が、18 溝からは、須恵器片３点、土師器片１点が出土した。いずれも詳細な時期は不明である。なお、轍は上記の７溝に切られており、９世紀後半以前と考えられる。

８土坑（図 20、図版４－３）　調査区北側で検出され、第１面の２土坑に切られる。長径は、復原でおおよそ 1.8 m、短径は 1.5 m、検出面からの深さ 35 ㎝で、土坑底は２土坑よりも浅い。埋土は、下層側面に粗砂～極粗砂混シルト層（３）が見られ、上層（１）には第１層系と考えられる極細砂ブロックが含まれる。このことから、本来上面で検出すべき遺構である。出土遺物は、瓦器片３点、須恵器片１点、土師器片 13 点である。図化し得る遺物はなかったが、瓦器には高台が退化した 13 世紀中頃と考えられる破片が見られ、須恵器は体部片ながら東播系の片口鉢と思われる破片であり、13 世紀中頃に埋没した可能性が考えられる。埋土の状況は、２土坑とさほど類似しないが、同様な箇所へ掘削されており、類似した機能を有していた可能性が考えられる。ただし、その詳細については不明である。

９土坑（図 20）　調査区北側中央で検出された不定形な土坑である。長軸約５m、短軸約 3.3 m。深さは、最も深い部分でも 15 ㎝程度の弱いくぼみである。埋土は周辺の地山層に類似するが、それよりもやや茶色味を帯びる、にぶい黄色のシルト層であった。遺物の出土はない。深さは異なるが、平面形が類似する例として、阪和道調査時のＢ地区土坑Ｂ－ 122 が挙げられる（江浦編 1995：131 頁）。ただし、同様に性格不明である。

10 土坑（図 20、図版４－４）　調査区中央やや南で検出された。長径約 70 ㎝、短径約 60 ㎝、深さ約 15 ㎝。埋土は、黄灰色シルトで、ほぼ同様ながら上層には粗砂がわずかに混じる。この埋土は、第２層上部層（図 12 － 11）と類似し、他の遺構とは埋土の様相が異なる。第２面に近い時期に掘削された可能性が考えられる。出土遺物は、瓦器の小片１点のみである。この破片は、外面に多数の指頭圧痕が、内面にはミガキが観察でき、13 世紀頃だろう。

11 土坑（図 21）　調査区西側、12・13 溝間で検出された。長径約 45 ㎝、短径約 35 ㎝、深さ約 20 ㎝。

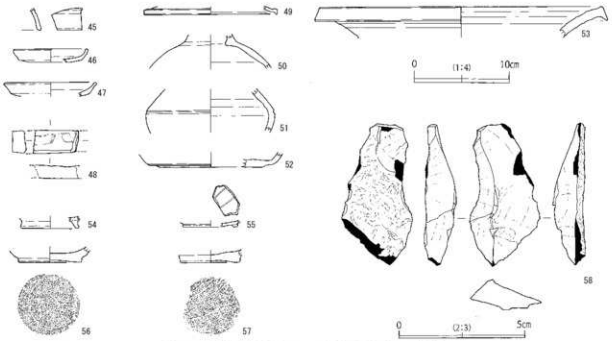


図 22　余部日置荘遺跡 09 － 1 調査区　第 2 層出土遺物

黄灰色シルト～極細砂を埋土とし、この埋土は第 2 層中部層（図 12 － 12）と類似する。出土遺物はない。

21 土坑（図 21、図版 4 － 6・7）　調査区南端で検出された。轍と考える 16 溝を切る。長辺 1.25 m、短辺 0.7 m、深さ 0.5 m。埋土は、3 層に分けられるが、大部分がにぶい黄色シルト層である。この埋土は、第 2 層中部層（図 12 － 12）と類似する。土師器片は 1 点出土したのみである。詳細な時期は不明だが、奈良時代以前の土師器とは異なるように見え、平安時代頃か。

b．第 2 層出土遺物（図 22、図版 6 － 2・7 － 4）

第 2 層からは、瓦器、黒色土器、須恵器、土師器、瓦、サヌカイト剥片などが出土している。これらのうち、図化し得たのが 14 点である。

45 は須恵器坏蓋。現存高は 2.3 ㎝。色調は灰（N 5 ／）。胎土は密で、焼成は良好。内外面とも回転ナデ。MT 85 型式で、6 世紀後半か。**46・47** は土師器皿。**46** は口縁部の約 6 分の 1 が残存し、復原口径 7.8 ㎝、現存高 1.3 ㎝。色調はにぶい黄橙（10 Y R 7 ／ 2）。胎土は密で、1 ㎜大の石英、長石が見られ、焼成は良好。内外面とも、口縁部はヨコナデ、体部はナデである。**47** は口縁部の約 6 分の 1 が残存し、復原口径 9.6 ㎝、現存高 1.4 ㎝。色調は橙（7.5 Y R 7 ／ 6）。胎土は密で、1 ㎜以下の石英、長石が見られ、焼成は良好。口縁部は内外面ともヨコナデで、体部は内外面ともナデ。いずれも 12 ～ 13 世紀頃か。**48** ～ **53** は須恵器。**48** は平瓶の把手か。最大長 4.7 ㎝、同幅 2.4 ㎝、同厚 1.4 ㎝。色調は灰白（N 7 ／）。胎土は密で、1 ㎜以下の石英、長石が見られ、焼成は良好。図面左右は破断面だが、これ以外の各面は生きている。表面には若干の凹凸が見られる。奈良時代、8 世紀か。**49** は坏 B 蓋。口縁部の約 12 分の 1 が残存し、復原口径は 17.0 ㎝、現存高は 0.8 ㎝。色調は灰（N 5 ／）。胎土は密で、焼成は良好。内外面とも回転ナデ。奈良時代、8 世紀か。**50** は壺。頸部の約 2 分の 1 が残存し、現存高は 3.7 ㎝。色調は灰（N 6 ／）。胎土は密で、焼成は良好。内外面とも回転ナデ。平安時代か。**51** は壺で、壺 K か。体

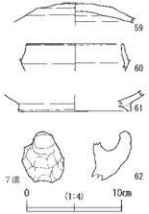


図 23　余部日置荘遺跡 09 － 1 調査区　第 3 面遺構出土遺物

部の約６分の１が残存し、現存高は 4.6 ㎝。色調は灰白（Ｎ７／）。胎土は密で、焼成は良好。内外面とも回転ナデ。奈良時代か。**52** は坏Ａか。底部の約６分の１が残存し、復原底径 10.8 ㎝、現存高 1.5 ㎝。色調は灰（Ｎ５／）。胎土は密で、焼成は良好。内外面とも回転ナデ。底部外面には接合痕が残る。奈良時代か。**53** は壺。口縁部の約 12 分の１が残存し、復原口径 29.8 ㎝、現存高 3.2 ㎝。色調は灰（Ｎ６／）。胎土はやや密で、焼成は良好。内外面とも回転ナデ。平安時代か。**54** は黒色土器Ａ類椀。高台部の約３分の１が残存し、復原底径 6.0 ㎝、現存高は 1.2 ㎝。色調は、外面が橙（7.5 Ｙ Ｒ７／６）、内面が黒（５Ｙ２／１）。胎土は密で、１㎜以下の石英、長石が見られ、焼成は良好。外面はヨコナデで、内面は剥離のため調整不明。10 世紀頃か。**55** は瓦器椀。底部の約６分の１が残存し、復原底径 5.6 ㎝、現存高 0.7 ㎝。色調は灰（Ｎ４／）。胎土は密、焼成は良好。外面、高台部分はヨコナデで、底部はナデ。内面は平行暗文が見られる。12 世紀中頃か。**56・57** は土師器椀か。いずれも底部のみ完存で、体部からそのまま底部に至るのでなく、弱く突出する。**56** は底径 6.2 ㎝、現存高 1.3 ㎝。色調は、外面が明黄褐（10 Ｙ Ｒ７／６）、内面が灰白（2.5 Ｙ７／１）。胎土はやや密で、１～５㎜大の石英、長石が見られる。体部外面はヨコナデ、内面はナデ。底部外面には回転糸切り痕が見られる。**57** は底径 6.5 ㎝、現存高 1.6 ㎝。色調は灰黄（2.5 Ｙ７／２）。胎土はやや密で、１～４㎜大の石英、長石が見られる。体部外面はヨコナデ、内面はナデで、底部外面には静止糸切り痕が見られる。いずれも土師器であれば焼成はやや良好というところで、極めて焼成の悪い陶器とは考えにくい。土師器としてよければ、山陽西部などで土師質土器椀とされるもので、時期は平安時代頃だろうか。**58** はサヌカイト剥片。背面には自然面を残す。44 同様、風化は著しいが、旧石器とは断定しがたい。

ｃ．時期

第２層から出土した遺物は、６世紀後半を最古とし、８世紀～ 13 世紀頃までを含む。ただし、明らかに 11 世紀と判断しうる遺物は見られない。遺構出土遺物も、同様な時期幅だが、６世紀中頃に遡る可能性もある破片も含まれる。まず、第２層上部に類する埋土をもつ遺構から、13 世紀頃の遺物が含まれ、第２層の最新の時期を 13 世紀頃と考えることができる。ただし、これ以下の第２層各層の詳細な時期については不明確である。６世紀代の遺物については、この時期のみの遺構は見られず、調査区ごく近辺での活動によるというよりも混入に近いと考えられる。しかし、今回の調査地から西へ約 200 ｍの阪和道調査地Ｌ地区では、６世紀中～後葉の須恵器窯が検出されており、当該期の遺物の出土することが、まったく異質な存在というわけではない。以後、７世紀は空白の時期と考えられるが、８世紀以降の活動痕跡が確認でき、中心は８世紀～９世紀頃と 13 世紀頃にあると考えられる。

第４項　まとめ

今回の調査で最も古い遺物は、風化が著しいサヌカイト剥片である。瀬戸内技法による剥片とは異なり、旧石器とは断定できないが、下っても縄文時代までに収まるものであろう。一方、最も古い遺構は、第３面で検出された複数の轍であろう。轍は、過去の太井遺跡や日置荘遺跡をはじめ、北側に隣接する真福寺遺跡の調査などでも検出されている。いずれも時期が古代～中世頃で、轍間隔も 1.5 m前後と、今回検出された轍と同様である。これらの轍については、江浦氏（1996）により、耕作地の造成、丘陵の削平、谷部の整地など、大規模土地開発において、土砂の運搬のために、荷車が利用されたことを示すものとして評価されている。今回の調査地においても、轍の先には谷地形があり、谷を埋め、整地した行為の一端を示すものとして評価しうる。そして、その時期は、９世紀後半頃に埋没した７溝に

切られることから、遅くともそれ以前と考えられる。7溝の機能時期をどの程度見積もるかにより、どこまで遡りうるのかは不明だが、他の遺跡で年代が狭くおさえられる資料に、大阪市長原遺跡の8世紀に遡る轍や、余部遺跡の7～8世紀代とされる轍（上林 1999、小浜・上林 2002）がある。ここまで遡るかは不明確だが、これに近接するか、やや遅れる時期の可能性もある。これは、今回の調査地の北側で行われた日置荘遺跡のJ地区とK地区の間にある谷状地形東肩部分に掘削された溝J－2（図24）から8世紀までとされる遺物が出土していることからも推測できる。なお、検出された轍の中には、両轍の間に、牛と推定される足跡が見られるものもある（江浦 1996）。今回の轍では、このような例は見られなかったが、轍と確実に結びつくとは考えられないものの、地山のシルト層に踏み込まれた牛と見られる足跡は確認できた。

これに後続する時期の遺構が、第3面の7溝である。上記のとおり、7溝の西延長が、日置荘遺跡K地区で溝K－1として検出されて（図24）、その埋没時期を9世紀後半頃とされている。J・K地区間段丘崖際には谷状地形（谷⑧）があり、これがある程度埋められた後に掘削されたと考えられる。なお、この谷状地形が7溝掘削時に完全に埋没し、周辺の平坦化が達成されていたのではないことは、今回の調査区において、7溝が谷状地形東端の堆積と思われる層（図12－12～14）を除去した段階で検出しえたことからもうかがえる。ただし、この谷状地形を横断する形で7溝が掘削されていると考えられることから、谷状地形を埋める行為と一連の行為と推測することができる。また、7溝、溝K－1とも遺物がほとんど出土しないことからは、用水路としての機能が推定され、耕地開発に伴い掘削された溝と考えられる。その開発時期については、8世紀代が考慮されていることは、第2章第2節第2項で記したとおりある。ただし、9世紀後半に埋没した後に、同様な用水路が掘削されない点は、この溝の掘削が理念先行的であったように思え、興味深い。

その後、10～12世紀の様相は不明確で、11世紀にいたっては明確に当該期と判断できる遺物も見られないが、13世紀には土坑などが見られ、人間の活動痕跡が見出せるようになる。また、13世紀は日置荘遺跡で多数の遺構、遺物が見つかる時期であり、13世紀段階に再開発が行われ、前代より平坦化が格段に進み、耕作地化していた可能性がある。遅くとも、14世紀には確実に調査地は耕作地となっている。当該期は、既に条里制が面的に展開する時期ではあり、現地表面で坪単位での大まかな方形区画は確認できるが、調査地周辺での坪内の地割では、1・6畦畔のように方位に沿った畦畔は見られない。理念よりも地形の実態に即したのだろう。なお、13～14世紀頃の遺物には、鋳造関連遺物が含まれる。今回の調査では、関連遺構の検出はなかったが、今回の調査地北側で行われた阪和道調査時日置荘遺跡J地区の調査では、中世屋敷地の西側で13世紀頃の鋳造関連遺構（土坑I－548）が検出されており、時期の矛盾はない。当遺跡を含む一帯は河内鋳物師の本拠地として知られ、今回の例も、これを裏付ける一資料といえる。さて、10世紀の様相が不明確な状況は、遺跡全体に敷衍できるものかもしれないが、11～12世紀の空白は、必ずしも遺跡全体に敷衍できない。面的な展開は13世紀であるが、11世紀は、西除川左岸側開発の画期とされており（鋤柄 1999：287頁）、11～12世紀は遺跡内でも様相差が存在する時期のようである。また、13世紀の画期は重源による狭山池改修によるところが大きく、今回の調査地も含めその恩恵を受けていたようである。これ以後、現地表面まで踏襲される大畦畔状の畦畔からは、14世紀以降、耕地の土地区画が比較的固定的であったと推測される。今回の調査では、15世紀の様相が不明ではあるが、遺跡全体の推移から見れば、やはり連続的に耕作が行われていたのかもしれない。16世紀後半以降は、ほぼ現在の地表面と同様と考えられ、同様に耕作が行われていたのだろう。

第４章　総　括

調査区ごとのまとめを受け、両遺跡全体の開発について簡便ながらまとめておく。

両遺跡の谷　太井遺跡、余部日置荘遺跡内における発掘調査では、複数の開析谷が検出されている。谷は、人間活動を促進であれ、規制であれ、規定する要因と思われ、これを考えることはあながち無意味ではないだろう。谷の一部については、第３章までに記したところであり、以下の谷番号も共通である。谷の番号は、北東の太井遺跡から南西の余部日置荘遺跡の順で、大まかに以下のとおりである（図２）。

太井遺跡では、①北東端、黒姫山古墳の東側、真福寺遺跡との境となる谷、②Ｆ地区、黒姫山古墳の西側、調査区南側の寺池・蓮池から北側の蔵王蔵池へ抜ける谷、自然流路Ｆ－１、③Ｉ地区、調査区南側の上池から北側の花田池に抜ける谷、自然流路Ｉ－１～６、である。太井遺跡と余部日置荘遺跡の間には、西除川が存在し、低位段丘、谷底平野となっている。

そして、この西側、余部日置荘遺跡では、④Ｃ地区東部９Ｂ・２Ｃ区、自然流路Ｃ－１が検出された谷、⑤Ｅ地区中央の谷Ｅ－１、⑥Ｇ地区西側の谷、⑦Ｊ地区の谷Ｊ－２、⑧Ｊ地区西、溝Ｊ－２を境に西への落ち込み、⑨Ｌ地区中央、自然流路Ｌ－１、⑩Ｍ地区西半部、⑪Ｐ地区、石池谷、の各谷である。このうち、①から⑨までをひとまず対象とする。なお、段丘呼称は小倉氏（2004）の区分を使用する。

谷の埋没時期　これらの埋没時期とその直上に見られる層については、大まかに以下のとおりである。

【太井遺跡】　①は、谷上層の最終的な堆積層から７～９世紀代の土器が出土していることから、最終埋没は９世紀とされていた（江浦編 1996：32 頁）。しかし、阪和道よりも南側の調査では、谷を埋める堆積層の直上に８世紀中頃の鋳造関連を含む遺構があることから、８世紀中頃には谷は埋没して居住域になっていたとされ、当該期における段丘上から谷部への活動展開がうかがえる（小谷 2007）。また、谷の最上部層は客土の可能性が示唆されており興味深い。８世紀中頃には谷がだいぶ埋没していたのか

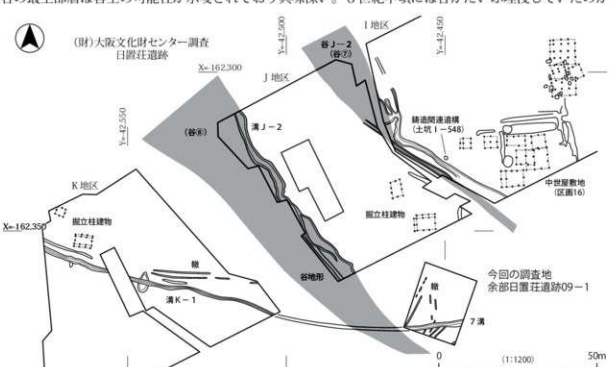


図 24　余部日置荘遺跡 09 － 1 調査区と周辺調査区

もしれない。なお、谷南東肩部では、灌漑水路の可能性も示唆される10世紀前半頃の可能性がある溝（溝Ａ－６・Ｂ－32）が検出されている。また、溝からは流入したとされる鉱滓が出土し、調査区外に広がる段丘上に関連する生産遺構の存在が示唆されている（江浦編 1996：33－35頁）。段丘上ではないが、同一谷の南側で上記のような鋳造関連資料が見られる点は興味深いが、時期的な齟齬がある。一方の北西肩部では、灌漑水路の可能性も考えられる溝（溝Ｃ－23）が掘削されている。出土遺物の時期は、奈良時代を上限とし、中世前期を下限とする（江浦編 1996：36頁）。②では、谷を埋める堆積層から７世紀代の須恵器が出土しており、谷の埋没時期の一点を示すとされる（鋤柄・江浦 1987：６頁）。直上の状況は不明だが、報告模式図（江浦編 1996：85頁）Ⅲ層（平安時代以前の流路堆積）直上にあるのはⅡ層（中世の遺物包含層）である。奈良・平安時代にはおおむね埋没していたのだろうか。ただ、積極的な活動痕跡は中世を待たねばならなかったのかもしれない。③は、流路が７世紀まで存続し（江浦編 1996：99頁）、飛鳥時代以降沼地化し、11世紀の土器を含む平安時代包含層が直上にあるものの（鋤柄編 1990、江浦編 1996：87頁）、流路Ｉ－２上層では中世以降の遺物が出土しており、一帯が長期間にわたり流路帯であったようである。なお、この谷筋は、古代における当遺跡や周辺の遺跡を灌漑していた幹線水路として位置付ける見解がある（小山田ほか 2001：35頁）。比較的長期間にわたり流路であった点からは、妥当な見解と思われる。

【余部日置荘遺跡】 ④は、最下部に奈良時代の遺物を含む層があり（江浦編 1995：36頁）、奈良・平安時代には自然流路は機能し（同183頁）、中世には廃絶し、直上に広く整地層がある（同145頁）。Ｌ２面上の谷で、周辺も含め比較的明瞭に確認できる。⑤は、概ね中世に埋没し（鋤柄ほか 1988：５頁）、14・15世紀に整地されている（市本 1995：201頁）。谷上面には、区画２があり、浅い谷であることもあってか、地表面に条里の乱れはない。おそらく北側で、④もしくは⑥と合流するのだろう。⑥は、８世紀に埋没する自然地形に沿った溝（溝Ｇ－207）が検出され（市本 1995：193－194頁）、概ね中世に埋没している（鋤柄ほか 1988：５頁）。⑥の延長は、北側で行われたＨＫＳ－17でも確認されている（小谷 2000）。小倉氏（2004）のＬ２・Ｍ２面境の段丘崖際の谷だろう。⑦は、埋土に６～８世紀の遺物含み（市本 1995：194頁）、８世紀に埋没とされている（同192頁）。ただし、谷上の溝のうち、溝Ｉ－７は12世紀、溝Ｉ－367は13～14世紀とされる（小野 1989）。近接する区画16が13世紀代を中心としており、この区画施工に伴い最終的に整地されたのかもしれない。阪和道調査部分では比較的狭いが、北へ向かい幅広になり、さらに北西に向かい明瞭な谷地形となっている。Ｍ２・１面境の段丘崖際の谷だろう。一方、浅くなる南東延長は、⑥と合流しているのであろう。⑧は、６～８世紀の遺物を含み（市本 1995：192頁）、８世紀代に廃絶したとされる（鋤柄ほか 1988：59頁）。その南への延長は、今回の調査地の南西から南端部を通ると思われ、⑦と合流するものと思われる。今回の成果からは、８世紀代に概ね埋没しているものの、谷部分の窪みは残存していたと考えられる。⑨は、最下層からＴＫ47型式（５世紀末）の須恵器が出土し、最下層の埋没時期を同時期とされている（江浦・岡本 1988：20頁）。その後、５世紀以降に進行する（江浦編 1995：351頁）が、中世になっても低まりは残存するようである。断面模式図では、埋没後の上層に中世水田作土層（Ⅴ層）がある（江浦編 1995：348頁）。

谷がどのように埋まっていったのか、埋められていったのかについては、全てについては必ずしもよくわからない。ただ、谷埋没時期はごく大雑把ながら、８世紀頃（①・②？・⑦・⑧）と中世（③・④・⑤・⑥・⑨？）に区分できる。また、埋没後に目立った遺構が見られる例は、①を除いてほとんどない。

谷の間の遺構 次に、各谷間の遺構について、特に谷に関わると推測される遺構について概略する。

【太井遺跡】 ①－②間では、さば山古墳東側で奈良時代を前後する時期の灌漑水路（溝D－13～16）が検出されている（江浦編 1996：37－38頁）。また、②の東に浅い谷地形があり、谷部の排水を意図としたとされる溝（溝E－38）が掘削されて、この付近では古代に遡る可能性がある轍が検出されている（江浦編 1996：39頁）。近在するさば山古墳削平との関連も考慮されており（江浦 1996）、この浅い谷地形の埋没にも関連するかもしれない。これ以外にも、溝の検出が見られるが、詳細は不明である。②－③では、飛鳥～奈良時代の建物群が多数検出され、奈良時代の鋳造工房も見られる。ここでは、生産域ではなく居住域の例ではあるが、7世紀後半には条里にほぼ一致するような溝が③東側のH地区で見られる（溝H－63）。しかし、建物群の区画溝であり、既に8世紀前半には見られない（鋤柄・江浦編 1987：96－99頁）。これ以外にも正方位を指向する溝が複数検出されているが（溝G－2・47）、いずれも建物群との関連で捉えられる遺構である。③と西除川谷底平野との間では、掘削の初現は7世紀代に遡る可能性があるものの、8世紀代に埋没している水路（溝J－9・12）が検出されている（江浦編 1996：190－191頁）。さらに、同様な箇所に平安時代（10世紀）に埋没する溝（溝J－4）が掘削されており、奈良時代から平安時代までの間における固定的な灌漑体系が考慮されている（江浦編 1996：193頁）。

【余部日置荘遺跡】 ④東側では、7世紀代の遺物が出土した溝（溝B－111）が見られる。灌漑水路の可能性も考えられるが、礫が多数出土している点が奇異である。以降しばらく遺構は見られず、12世紀頃以降、密な遺構が見られる。なお、④際では、中世頃とも考えられる轍が検出され、④の埋没にかかわるとも考えられる。④－⑤間では、13世紀を中心とした集落が検出されている。これ以外に、正方位を指向する溝（溝B－151・C－41）が見られるが、集落に伴う区画溝のようである（中村・金光編 1988：107・108頁）。これより西側の、⑤から⑦間には、密に中世の遺構が見られ、13世紀を中心とした集落となっている。これらは当然、条里地割に規制されている。なお、正方位とは一致しないものの、座標北から西へ12度振る直線的な溝（溝I－389）が見られ、7世紀前半とされる点はやや興味深い。⑦－⑧間は狭く、阪和道部分では顕著な遺構はない。⑧以西のレベルと比較すれば、⑦－⑧間は相対的に全体が低まっており、全体を段丘崖際の谷地形と捉えうるかもしれない。また、⑧の北西方向延長が不明瞭なのだが、⑦と合流するのかもしれない。⑧－⑨間では、本文中でも記したように、灌漑水路（用水路）と考えられる溝（溝K－1）が検出され、今回検出の7溝と連続することから、⑧を横断していると考えられる。また、今回検出の轍は、この溝掘削に先立ち、⑧の埋め戻しに伴い残されたのだろう。

以上から、谷を横断する遺構は、太井遺跡では見られず、余部日置荘遺跡では見られるものの、⑧を除き、中世以降である。また、⑧についても谷地形の末端に近く南側に向かい地形が高まり、⑧を挟んだK地区と今回の調査地のレベルも類似することから、克服しやすい状況であったのかもしれない。

まとめ　上記の考古学的な成果を他の成果と結び付けておく。時期は13世紀頃までとしておく。

太井遺跡では、7世紀に遡る可能性があるものを含むが8世紀代やその前後（C－23？、D－13～16、J－9・12）、および10世紀（A－6・B－32、J－4）、中世（C－23？）の灌漑水路とも推測される溝が検出されている。これらは必ずしも正方位ではなく、地形を克服できていないが、これらの溝が位置する箇所は、現地表面でも条里地割がやや乱れ気味の箇所にあたり、思いの他、現地表面の地割と近似するものが多い。また、上述のとおり③西側の溝J－9・12と溝J－4は、8世紀に埋没した前者の溝部分に、10世紀に埋没する後者の溝が見られ、固定的な灌漑体系が考慮されている。これ以外についても、短期間かもしれないがD－13～16のようなほぼ同一箇所における溝の掘削、

谷を挟んでいるがC－23からA－6・B－32への推移などを考えることができれば、比較的安定的に耕作が行われていたとも考えられる。

ただし、集落動態からは、建物や鋳造関連遺構等が8世紀中頃で一時期途絶え、詳細な時期は不明だが、次に鋳造関連遺構等が見られるのは平安時代のようである。これが、単に居住域の調査範囲外へ移動ではなく、吉田　晶氏が説かれるように天平宝字元（757）年の橘奈良麻呂の乱に多治比一族の多くが行動をともにしたことが大きく影響し（吉田 1983：94 頁）、一時的に集落が廃絶するのであれば、9世紀を継続時期とのみ考えることはできない。そして、上記J地区の溝についても、8世紀と10世紀のそれぞれ短期間にのみ使用されたのみで、同一箇所での再開発と考えても良いかもしれない。両溝は、21～36 m程離れており、いずれも現地表面の坪境の位置に近似することから、条里制下であれば、時期を違えた開発と考えることもできる。ただし、8世紀段階まででこれ以後近世にまでつながる灌漑体系の基盤はでき、L1面についても耕作可能な状況であったのだろう。もし、9世紀を空白時期と考え10世紀の再開発といえるのであれば、平安時代の開発事例とされる荒廃田の再開発（吉田 1965）の一例とも考えられる。今後の調査による9世紀の様相解明が待たれるところである。

また、条里開発だが、集落に伴う溝には、短期間廃絶ながら正方位を指向するものが多い点は、興味深い。水田の場合地形の制約を受けるが、居住域の区画の場合その制約は少ない。ここからは、比較的早い段階に条里地割が施行されていた可能性もある。ただし、その広がりは不明で、比較的短い間隔で谷が存在する地形の制約から、面的な施工は谷が概ね埋没する中世を待たなければならなかったのではなかろうか。

なお、③の谷部分での花粉分析によれば、古墳時代には遺跡周辺でイネの栽培が行われている程度で、遺跡内で水田耕作が行われるのが平安時代以降だが、平安時代における稲作の範囲は狭く、低湿地の多くは荒地として残されていた可能性があり、中世に入って荒地の開墾がかなり進み、水田耕作が盛んに行われるようになった、と推測されている（パリノ・サーヴェイ株式会社 1996：309 頁）。古代以降の耕作地としての状況が不明ではあるが、谷部に少なからず中世の包含層が確認できることからは、中世段階での働きかけが推測できる。中世段階の開発については、以下で余部日置荘遺跡も含めてまとめる。

余部日置荘遺跡では、中世以前の遺構が基本的に少ない。これには、中世の遺構による撹乱という要素もあると思われるが、遺物の状況からも、基本的に中世以前は、西除川左岸のL2面における耕地開発は行われていなかったのだろう。

⑥の谷を挟んだ西側のM2面も同様だが、7世紀前半とされる直線溝（溝Ⅰ－389）は、当該期における開発を考える上で興味深い。阪田育功氏（2009）は、南河内における古代の斜方位直線道路を考察する中で、座標軸から14度西へ振る日置荘原寺町西方の里道を挙げ、斜行地割を指摘されている。そして、道路敷設と共に地割施行が狭山池築造と対応し7世紀前半に行われたと説かれている。上記の溝Ⅰ－389はこの方位と近似するが、同時期における太井遺跡をも含めた他の遺構で類似するものはなく、区画の規制が緩やかであったとする阪田氏の指摘どおりである。また、基本的に現在においても西南西から東北東で同一標高が見られる点は、図2のとおりである。

一方、この段階で耕地のみならず開発が行われているのは、M1面上である。江浦氏は、阪和道部分調査L地区須恵器窯跡上部が、奈良時代以降に削平されていることから、遅くとも8世紀前半（平城宮Ⅱ）には大規模開発が行われたと想定されている（江浦編 1995：449 頁）。そして、第2章に記したように、これを日置荘遺跡における条里制施工段階の開発の第1段階として評価し、日置部との関連を考慮され

る（江浦 1991：12 頁）。ただし、日置部が大規模開発を行いうる勢力を持っていたのかは疑問である。近接する丹上遺跡については、丹比道をひかえての開発である点や官衙的な建物配置から、開発の背景に律令段階における官憲の存在を考慮されている（同：14 頁）。阪和道部分調査M地区では、奈良時代の計画的に配置された建物群が検出されており（江浦編 1996：386 － 394 頁）、江浦氏も考慮されているとは思うのだが、より積極的に開発の背景に律令国家を考慮しても良いように思える。

8 世紀は土地制度・税制改革の諸法が見られる。養老 6（722）年の百万町歩開墾計画をはじめ、翌年の三世一身法、天平 15（743）年の墾田永年私財法がそれである。渡辺晃宏氏（2001）によれば、これによりそれまで律令国家が掌握してこなかった開墾田を把握するようになった、日本律令制土地支配の整備拡充過程であり（同：142 頁）、律令制の崩壊ではなく、律令国家による土地支配がより強固になった（同：227 頁）とされる。墾田永年私財法は平城宮Ⅲの段階かもしれないが、8 世紀後半代の遺物も見られ、このような中で、上記の開発が 8 世紀代に行われたのだろう。

そして、この大規模開発に伴い、⑦・⑧が一定埋められた可能性も考えられる。江浦氏も、平安時代までを含むが、⑨も含めた同様な見解を示されている（江浦 1991：18 頁）。そして、⑧の埋め戻しに伴い、今回の調査で確認された轍が残され、今回の調査や阪和道調査K地区の溝（7 溝・溝K－1）が掘削されたとの推測は上記のとおりである。この溝は、M 1 面上の谷⑧を跨ぐが、⑧を挟んだ東西の地山面の高低差はあまりなく（図 11）、⑧の埋め戻しもあり、溝底のレベルを考慮すれば段丘上の浅い谷（金田 1997 の「微細微地形」）を克服することはできたのだろう。東への延長が不明のため、⑦を克服しM 2 面へ展開できたのかは不明だが、少なくとも⑥を克服したL 2 面への展開は、この段階では困難であったと思われる。これは、金田章裕氏（1997：227 頁）が、8 世紀頃の国家・準国家レベルの開発範囲について、用排水溝の整備などにより「微細微地形」を克服し、「基本微地形」（同一段丘面などの範囲を指す）の限界近くまで広がるとされる一例だろう。この溝は、9 世紀後半に最終的に埋没する。後述するように、9 世紀末～ 11 世紀中葉にかけて、M 1 面上では重複しつつ集落が営まれており、この開発に際し、最終的に埋め戻されたとも考えられる。

なお、余部日置荘遺跡は、古代では狭山池の灌漑範囲には含まれないようである（小山田ほか 2001：35 頁）。近世における当遺跡付近への狭山池からの灌漑については、第 2 章のとおりだが、古代段階で近世同様に西除川から取水していたとは考えにくい。ここからは、狭山池による灌漑とは別に開発が行われたと考えられる。推定ながら、上記の溝（7 溝・溝K－1）は、西による段丘崖の谷筋より取水していたのだろう。律令国家主導の開発の機運の中で、開発から得られるうまみを求めての灌漑水路掘削とも考えられる。この主体として、江浦氏が日置部との関連を考慮されているのは上述のとおりである。しかし、開発という方向性を律令国家が用意したのであれば、日置部のみならず他の有力氏族を考慮しても良いように思える。当該地域は丹比郡に属することから、丹比氏が考慮されるが、丹比氏と日置部との関係がわからない。また、第 2 章でも記したが、藤澤一夫氏は当遺跡に近接する萩原神社付近に百舌鳥土師氏の居住を推定されており、これらの氏族の関与も推測できる。また、この開発が条里開発であったのかという点についてだが、7 溝・溝K－1 は正方位ではないものの、想定される坪境付近をかすめるように蛇行しているようにも見え、江浦氏（1991）はこの点を評価されている。何れとも決しがたいが、確認されている遺構から推定できる開発し得た範囲は狭く、狭山池の灌漑範囲には含まれず、現地表面でも当該箇所周辺で坪単位の方形地割が確認しにくい点からは、たとえ条里開発だったとしてもかなり理念先行型であったように思える。ただし、上述のように開発の根本的背景に律

令国家が存在するのであれば、理念先行的ではあるものの、条里開発と考えても良いかもしれない。

続いて江浦氏（1991：12 頁）は、上記の開発の第一段階に続く第二段階の開発として、条里制下における実際的運用段階を平安時代、特に 10 世紀に求め、その主体として日置荘の存在を考慮している。上記のとおり、奈良時代の遺構が見つかったＭ１面上では、９世紀末～ 11 世紀中葉の集落が見つかっており、区画は検出し得なかったが、正確に１町四方に収まっていることから、条里地割の規制が働いていたとされている（江浦編 1996：450 頁）。これを評価されてのことと思われ、遅くとも 10 世紀に条里地割が施行されていたことは間違いない。

ただ、当該箇所での条里地割施行はうかがえるが、Ｍ１面以外での様相が不明である。特に、10 世紀では遺跡全体で様相が不明確であるが、当該期を特徴付ける遺物については、調査区を通じて散在的とされているから（鋤柄 1999：338 頁）、痕跡が皆無ということではない。ただし、後の 11 世紀よりも低調である点は否めない。耕作地となっていた場合、当然遺物が少なく、さらに中世の開発があったのであれば、様相解明は困難である。このため、10 世紀開発の是非については語りにくい。この段階では、８世紀の大規模開発以来の灌漑経路が継続していたのかもしれないが、少なくとも新規の水路開削など大規模開発は考えにくい。上述の太井遺跡では 10 世紀頃に水路掘削などが行われており、西除川右岸の一部では規模不明ながら耕作開発が行われている。ここからは、同様な小規模開発が行われた可能性は考えられる。この点で、より広い範囲を視野に入れた、他遺跡の当該期における段丘克服過程が参考になるかと思えるが、現状で調べきれていない。

単純に荘園開発の時期と敷衍することが許されれば、文献に荘園の名を求められる。第２章で記したように、今回の調査地を含めた一帯は、日置荘と田井荘と考えられ、田井荘の初見は保延３（1137）年、日置荘の初見は仁安２（1167）年で、12 世紀前半～中葉である。なお、日置荘、太井とも郷名ではなく、いずれも荘園の名で初出ともいえ、荘園開発により積極的に開かれるようになった地域なのだろう。12 世紀以前のいつから荘園となったかは文献からは不明だが、余部日置荘遺跡での様相からは、Ｍ１面以外でも 11 世紀から遺物が散見されるようになる。上述のＭ１面上の集落が 11 世紀中葉までであり、これと重複しつつ概ね後続する点からは、Ｍ１面上の開発とは異なる性格の開発が 11 世紀頃始まったとも考えられ、これが荘園開発であった可能性をここでは考えておきたい。そして、11 世紀頃からＬ１面でも遺物が散見できる点を評価すれば、同時期に灌漑方法の発展があったとも考えられ、近世に連なる西除川からの取水による灌漑の基点がこの時期にあったとも推測される。そして、この一定の開発を受け、さらなる要望の高まりの中で、13 世紀の重源による民意を受けたとされる狭山池改修があり、開発に拍車がかかり面的な開発につながったとも推測される。この点で、11 世紀にも谷を跨ぐような開発があった可能性もあるが、確実なのは 13 世紀であろう。谷上に見られる整地層には、⑤のように 15 世紀まで下るものもあるが、13 世紀の開発を契機としているものが多いと思われる。当然、谷は条里地割の正方位に一致しないため、条里制に規制された集落を形成する際に最終的に埋め戻され、それまで谷地形が担ってきた灌漑水路機能が坪境部分に溝として移された可能性も考えられる。特に、④・⑥の谷は中世における幹線水路と想定されているが（小山田ほか 2001：44 頁）、中世に埋没することは上記のとおりである。④近辺には上記の溝Ｃ－ 41 が見られるが、代替機能を有したとは考えにくい。13 世紀頃には別の灌漑形態が模索されたのかもしれない。一方、⑥は概ね埋没した中世以後も低まりが残っており、現代でも同様な位置に水路が見られ、灌漑水路として継続的に機能していた可能性が高い。灌漑水路の詳細は検討不十分だが、現在に至る条里景観形成に、この段階の開発が果たした役割は大きい。

参考文献（50 音順）

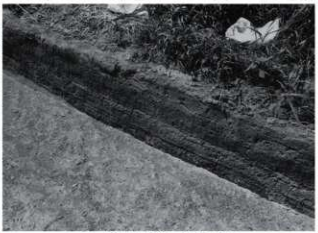
足利健亮 1985『地形発達と地質』『松原市史』第 1 巻本文編Ⅰ　松原市役所
阿部幸一 2006「太井遺跡（05021）」『大阪府教育委員会文化財調査事務所年報 10』大阪府教育委員会
阿部幸一 2008『余部日置荘遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告 2007－6　大阪府教育委員会
池邊　彌 1981『和名類聚抄郡郷里驛名考證』吉川弘文館
市川秀之・植田隆司・光谷拓実・渡邊正巳 1998『狭山池』埋蔵文化財編　狭山池調査事務所
市川秀之 1998「発掘成果からみた各時代の狭山池」『狭山池』埋蔵文化財編　狭山池調査事務所
市本芳三 1990「ＧＤトレンチ」『太井遺跡（その４ほか）日置荘遺跡（その１－２）』大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター
市本芳三 1995「Ⅱ調査区の調査成果」『日置荘遺跡』大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター
井上正雄 1921『大阪府全志』巻之四　清文堂（1976 年復刻版）
入間田宣夫 1976「平安時代の村落と民衆の運動」『岩波講座　日本歴史　古代４』岩波書店
入江正則ほか 1988『日置荘遺跡（その４）』大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター
入江正則・岡本健一 1989「石池谷地区」『日置荘遺跡（その５）』大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター
岩宮未地子 2004「日置荘遺跡（ＨＫＳ－19）」『平成 14 年度下水道管布設工事に伴う立会調査概要報告』堺市文化財調査概要報告 104　堺市教育委員会
江浦　洋 1987「日本出土の統一新羅系土器とその諸問題 1」『太井遺跡（その２）』大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター
江浦　洋・岡本健一編 1988『日置荘遺跡（その３）』大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター
江浦　洋 1991「条里制施行の諸段階とその背景」『大阪文化財研究』創刊号（財）大阪文化財センター
江浦　洋編 1995『日置荘遺跡』大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター
江浦　洋編 1996『太井遺跡』大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター
江浦　洋 1996「轡と開発」『大阪文化財研究』第 10 号　財団法人大阪府文化財調査研究センター
小倉博之 2004「２　２－３（６）大阪平野南部の変動地形と段丘面」『日本の地形６近畿・中国・四国』東京大学出版会
小倉博之・吉川周作・此松昌彦・木谷幹一・三田村宗樹・石井久夫 1992「大阪府、上町台地南部の台地構成層と地形面の形成時期」『第四紀研究』31（3）日本第四紀学会
小野久隆 1989「原寺地区」『日置荘遺跡（その５）調査の概要』大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター
柿沼菜穂 2005「日置荘遺跡（ＨＫＳ－20）」『平成 15 年度下水道管布設工事に伴う立会調査概要報告』堺市文化財調査概要報告 107　堺市教育委員会
梶原　勝 1999「考察　植栽痕」『染井Ⅴ』豊島区埋蔵文化財調査報告書 12　豊島区教育委員会
門脇禎二 1954「第２章１原始時代から古代へ　２古代国家と日置氏の動き」『日置荘町誌』大阪府日置荘町役場刊
川内春三 1999「近・現代における狭山池水下地域の導水経路と溜池環境の変貌」『狭山池　論考編』狭山池調査事務所
河音能平編 1991『美原町史』第３巻　史料編Ⅱ中世　美原町
上林史郎 1999「余部遺跡（その２）発掘調査概要・Ⅱ」大阪府教育委員会
金田章裕 1997「古代・中世における水田景観の形成」『稲のアジア史３』（普及版）小学館
国土地理院 1983『１：25,000　土地条件図　大阪東南部』
国土地理院 2007「１：25,000　地形図　古市」
小谷正樹 1997「日置荘遺跡発掘調査概要報告ＨＫＳ－14 地点」『堺市文化財調査概要報告』63　堺市教育委員会
小谷正樹 2000「第２章第３節日置荘地区」『平成 10 年度下水道管布設工事に伴う立会調査概要報告』堺市文化財調査概要報告 86　堺市教育委員会
小谷正樹 2007「太井遺跡発掘調査概要報告ＴＡＩ－１」『堺市埋蔵文化財調査概要報告』114　堺市教育委員会
小浜　成・上林史郎 2002「余部遺跡」大阪府埋蔵文化財調査報告 2001－２　大阪府教育委員会
小山田宏一・中山　潔・有井宏子・白江人智・植田隆司 2001『大阪府立狭山池博物館　常設展示案内』大阪府立狭山池博物館
小山田宏一 2002「長源の改修と南河内台地の再開発」『長源とその時代の開発』大阪府立狭山池博物館図録４　大阪府立狭山池博物館
阪田育功 2009「南河内における古代の斜方位直線道路と周辺地割」『大阪府立狭山池博物館研究報告』６　大阪府立狭山池博物館
狭山池地質研究会 1999「狭山池の堆積物」『狭山池　論考編』狭山池調査事務所
狭山池調査事務所事務局 1999「狭山池灌漑地域の変遷」『狭山池　論考編』狭山池調査事務所
鹿野吉則 1990「日置荘遺跡発掘調査概要報告－石池都市下水道築造に伴う－」『堺市文化財調査概要報告』１堺市教育委員会
鹿野吉則 1992「日置荘遺跡発掘調査概要報告－ＨＫＳ－11 地点の調査－」『堺市文化財調査概要報告』32 堺市教育委員会
鹿野　晃 2004「太井遺跡の調査成果（建物跡等）」『平成 15 年度冬季企画展　遺跡が語る美原の歴史』Ｍ・Ｃみはら
柴田せつ子・川野瑛子・中村武重 1996「太井遺跡Ⅰ調査区から出土した流木のＣ－14 年代測定結果報告」『太井遺跡』大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター
白神典之 1997「平成６・７年度下水道管布設工事に伴う塔塚古墳・家原城跡他立会調査概要報告　第２章　平成７年度の調査　第７節　日置荘遺跡周辺」『平成６・７年度　市内遺跡立会調査概要報告』堺市文化財調査概要報告第 64 冊　堺市教育委員会
鋤柄俊夫・江浦　洋編 1987『太井遺跡（その２）』大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター
鋤柄俊夫・市本芳三・本間元樹 1988『日置荘遺跡（その２）調査の概要』大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター
鋤柄俊夫編 1990「太井遺跡（その１－２・２－２・３－２・４）」『太井遺跡（その４ほか）日置荘遺跡（その１－２）』大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター
鋤柄俊夫 1995 a「位置と環境」『日置荘遺跡』大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター

飯柄俊夫 1995 b「平安時代以降の遺物について」『日置荘遺跡』大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター
飯柄俊夫 1999「中世村落と職能民」『中世村落と地域性の考古学的研究』大巧社
杉本清美 2004「太井遺跡・大保遺跡（02054）」『大阪府教育委員会文化財調査事務所年報７』大阪府教育委員会
鈴木康之 2005「山畑・山陽」「全国シンポジウム　中世窯業の様相～生産技術の展開と編年～　発表要旨集」全国シンポジウム「中世窯業の様相～生産技術の展開と編年～」実行委員会
十河稔郎 1991「日置荘遺跡発掘調査報告書」『堺市文化財調査報告』52　堺市教育委員会
高尾一彦・門脇禎二 1954「第２章１原始時代から古代へ　１大昔の南河内と町のはじめ」『日置荘町誌』大阪府日置荘町役場刊
高尾一彦 1954「第２章２古代から封建時代へ　１日置荘の発展」『日置荘町誌』大阪府日置荘町役場刊
高重　進 1975『古代・中世の耕地と村落』大明堂
竹内理三・山田英雄・平野邦男編 1985『日本古代人名事典』６（第６刷、第１刷 1973 年）吉川弘文館
舘野和己 2004「ヤマト王権の列島支配」『日本史講座』１東アジアにおける国家の形成　東京大学出版会
田中久夫 1988「河内国丹南郡狭山郷日置庄の鋳物師と鉄の鍋」『櫻原考古学研究所論集』10　吉川弘文館
趙哲済 2001「瓜破台地東北部の段丘について」『大阪市文化財協会　研究紀要』第４号　財団法人大阪市文化財協会
續伸一郎 1986「日置荘遺跡発掘調査報告ＨＫＳ－３地点」『堺市文化財調査報告』29　堺市教育委員会
續伸一郎 1991「日置荘遺跡発掘調査概要報告ＨＫＳ－９地点」『堺市文化財調査概要報告』21　堺市教育委員会
寺川史郎・林日佐子・亀井　聡・奈加智美 1996「余部遺跡」『堺市文化財調査研究センター調査報告書第 11 集
直木孝次郎 1976「丹比連について」『美原の歴史』第２号　美原町教育委員会
直木孝次郎 1985a「丹比地方の氏族」『松原市史』第１巻本文編１　松原市役所
直木孝次郎 1985b「正倉院文書にみえる人びと」『松原市史』第１巻本文編１　松原市役所
直木孝次郎・森　杉夫　監修 1986『大阪府の地名Ⅱ』日本歴史地名体系 28　平凡社
直木孝次郎編 1987『美原町史』第２巻　史料編Ⅰ古代　美原町
永原慶二監修 1999『岩波　日本史辞典』岩波書店
長橋良隆・吉川周作・宮川ちひろ・内山　高・井内美郎 2004「近畿地方および八ヶ岳山麓における過去 43 万年前の広域テフラの層序と編年」『第四紀研究』43（1）　日本第四紀学会
中村浮磯・松山　聡編 1987『太井遺跡（その３）』大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター
中村浮磯・金光正裕編 1988『日置荘遺跡（その１）』大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター
西川寿勝・渡辺晴香・内田俊秀・甚田真友子 2003『余部遺跡Ⅱ』大阪府埋蔵文化財調査報告 2002－１　大阪府教育委員会
西口陽一 2004『余部遺跡Ⅲ』大阪府埋蔵文化財調査報告 2003－１　大阪府教育委員会
服部昌之 1999「美原町の地形」『美原町史』第１巻本文編　美原町
原秀三郎 1962「８世紀における開発について」『日本史研究』61 号　創元社
原田信男 2008「中世の村のかたちと暮らし」角川選書 425　角川学芸出版
林日佐子・小浜　成 1998『余部遺跡（その２）発掘調査概要・Ⅰ』大阪府教育委員会
パリノ・サーヴェイ株式会社 1996「太井遺跡Ⅱ調査区１地区流路採集土壌の花粉・珪藻分析」『太井遺跡』大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター
福岡澄男 2002「河内鋳物師とその周辺」『大阪文化財論集Ⅱ』(財) 大阪府文化財センター
藤澤一夫 1954「河内萩原寺考」『日置荘町誌』大阪府日置荘町役場
藤澤一夫 1995「河内萩原寺考」『日置荘遺跡』分析・考察編　大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター
堀内和明 1995「河内」『日本荘園データ１（畿内・東海道・東山道）』国立歴史民俗博物館博物館資料調査報告書６
堀内秀樹 2001「江戸の遺物　２陶磁器　器種と分類７軟木鉢」『図説江戸考古学研究事典』柏書房
増田遠彦 1995「平成５年度下水道立会調査概要報告」『堺市文化財調査概要報告』48　堺市文化財調査概要報告　堺市教育委員会
栫本　哲 1999『余部遺跡（その１）発掘調査概要・Ⅱ』大阪府教育委員会
栫本　哲・森屋直樹・井西貴子 2000『余部遺跡（その１）』大阪府埋蔵文化財調査報告 1995－５　大阪府教育委員会
松山　聡・中村浮磯 1987「Ｋ地区の調査成果」『太井遺跡（その３）』大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター
水野正好 1978「河州丹南八上両郡境長和寺小考」『美原の歴史』第３号　美原町教育委員会
光谷拓実 1998「狭山池出土木樋の年輪年代」『狭山池　埋蔵文化財編』狭山池調査事務所
美濃部達也 1999「植栽痕について」『東京都新宿区払方町遺跡』新宿区払方町遺跡調査団
宮川　満 1954「第２章２古代から封建時代へ　２封建農村の成長」『日置荘町誌』大阪府日置荘町役場刊
森屋直樹・栫本　哲 1998『余部遺跡（その１）発掘調査概要－府営余部南住宅建設に伴う発掘調査－』大阪府教育委員会
八木正徳・池峯龍彦・十河良和 1992「日置荘遺跡発掘調査概要報告－ＨＫＳ－８地点・堺市日置荘西町（石池・下水）」『堺市文化財調査概要報告』第 32 冊　堺市教育委員会
矢作健二・辻　康男・辻本裕也 2003「南瓦町遺跡の自然科学分析」『堺市文化財調査概要報告』99　堺市教育委員会
山上　弘・市本芳三編 1987『太井遺跡（その１）』大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター
吉川周作 1993「大阪盆地南部」『大阪層群』創元社
吉川真司 2004「律令体制の形成」『日本史講座』第１巻東アジアにおける国家の形成　東京大学出版会
吉田　晶 1965「平安期の開発に関する２・３の考察」『史林』第 48 巻第６号　史学研究会
吉田　晶 1983「古墳と豪族」『古代の地方史』３　朝倉書店
渡辺晃宏 2001『日本の歴史 04　平城京と木簡の世紀』講談社

図　　版

図版１　太井遺跡09－１調査区　遺構

１．断面（西壁）（東から）



２．断面（北壁）（南東から）

３．遺構面　全景（北東から）

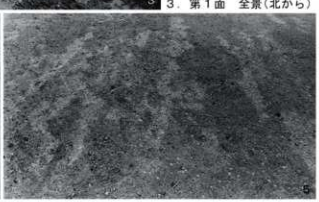
４．遺構面　北西側（南から）

５．遺構面　南側（西から）

図版２　余部日置荘遺跡09－１調査区　遺構（１）

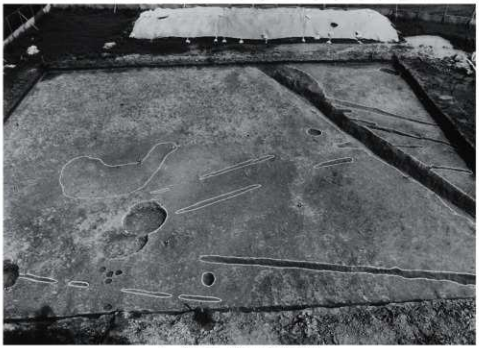
１．断面（西壁）（南東から）
２．断面（西壁）（南東から）

３．第１面　全景（北から）



４．第１面　２土坑断面（南から）
５．第１面　小溝群検出状況（北東から）
６．第２面　全景（北西から）

図版３　余部日置荘遺跡09－１調査区　遺構（２）



１．第３面　全景（北西から）

２．轍（12・13溝）（北東から）

３．轍（14・15溝）（北から）

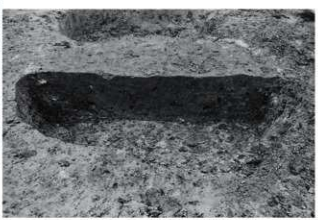
４．轍（17・18溝）（北東から）

５．轍（19・20溝）（北東から）

図版４　余部日置荘遺跡09－１調査区　遺構（３）

1．第３面　７溝全景（東から）

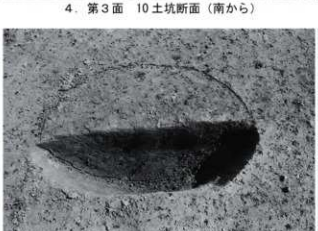
2．第３面　７溝断面（西から）



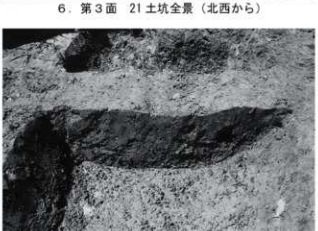
3．第３面　８土坑断面（南東から）

4．第３面　10土坑断面（南から）

6．第３面　21土坑全景（北西から）

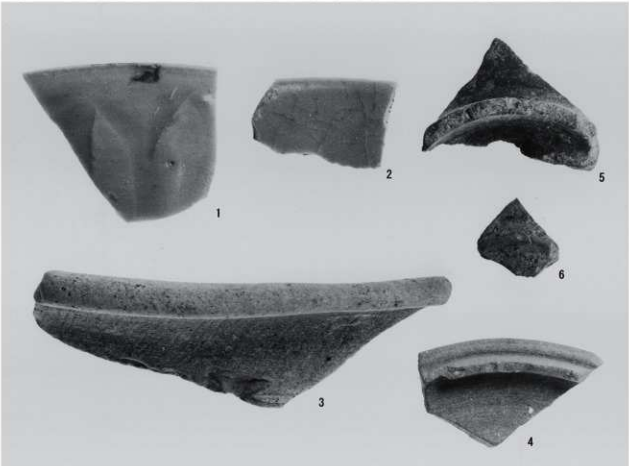


5．第３面　11土坑断面（南西から）

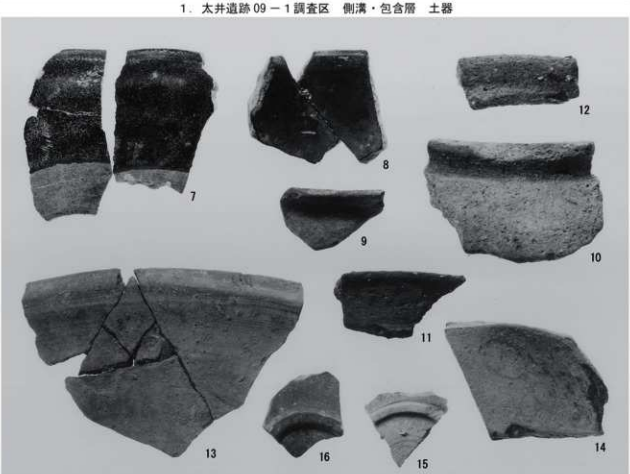


7．第３面　21土坑断面（北東から）

図版５　太井遺跡09－１調査区　遺物、余部日置荘遺跡09－１調査区　遺物（１）

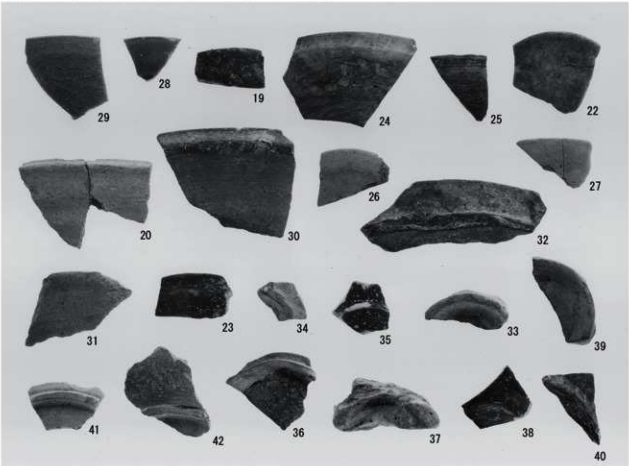


１．太井遺跡 09 －１調査区　側溝・包含層　土器

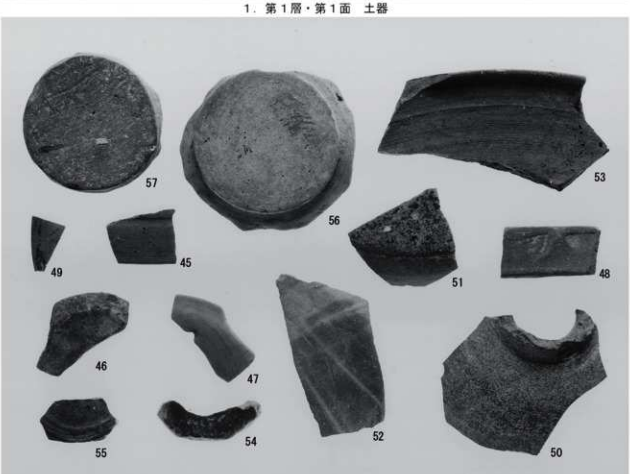


２．余部日置荘遺跡 09 －１調査区　側溝・第０層　土器

図版６　余部日置荘遺跡09－１調査区　遺物（２）



１．第１層・第１面　土器



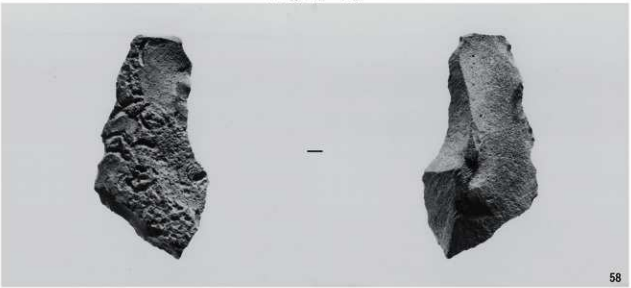
２．第２層　土器

図版７　余部日置荘遺跡09－１調査区　遺物（３）

１．第１面　３溝　埴輪

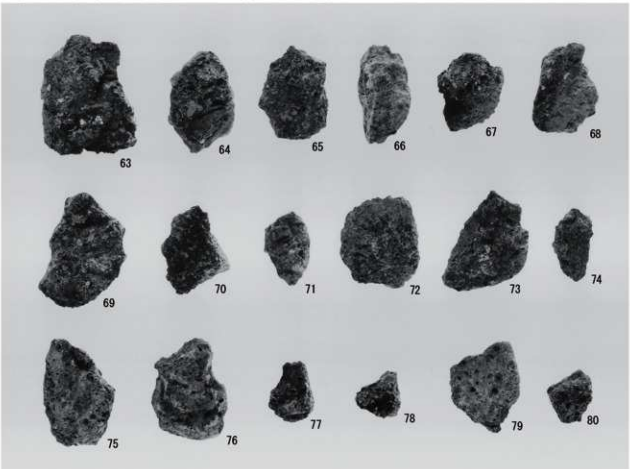
２．第３面　７溝　土器

３．第１層　石器



４．第２層　石器

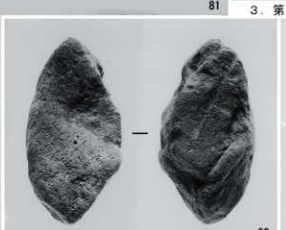
図版８　余部日置荘遺跡09－１調査区　遺物（４）



１．第１層　炉壁

３．第１面　３溝　炉壁

２．第１層　羽口？



４．第１層　鋳型？

５．第０層　銭

報 告 書 抄 録

ふりがな	たいいいせき・あまべひきしょういせき
書名	太井遺跡・余部日置荘遺跡
副書名	大阪府営水道中期整備事業「バイパス送水管布設工事」に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	（財）大阪府文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第199集
編著者名	市村慎太郎
編集機関	（財）大阪府文化財センター
所在地	〒590－0105　大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号　TEL　072－299－8791
発行年月日	2010年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
たいいいせき 太井遺跡	おおさかふ 大阪府 さかいし　みはらく 堺市　美原区 たい 太井	271471	454	34度 32分 33秒	135度 33分 21秒	20090707 ～ 20090930	378㎡	大阪府営水道中期整備事業バイパス送水管布設工事
あまべひきしょういせき 余部日置荘遺跡	おおさかふ 大阪府 さかいし　ひがしく 堺市　東区 ひきしょうはらでらまち 日置荘原寺町	271438	184	34度 32分 14秒	135度 32分 35秒		356㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
太井遺跡	集落跡・生産遺跡	中世以降	落ち込み	青磁碗（龍泉窯）、瓦器椀、土師器皿、炉壁	西除川谷底平野部分
		古代		黒色土器椀	
		古墳		須恵器蓋坏	
余部日置荘遺跡	集落跡・生産遺跡	中世以降	水田、土坑、溝、小溝群	青磁椀（同安窯）、瀬戸・美濃系陶器、東播系須恵器鉢、瓦器椀・皿、土師器羽釜・甕・坏・皿、銭（元豊通寶・模鋳銭）、炉壁、羽口？、鋳型？	16世紀後半頃および、13～14世紀頃
		古代	土坑、溝、轍	黒色土器椀、須恵器坏、土師器皿	8～9世紀中心 平安時代？の底部に静止・回転糸切り痕を残す土師器片有り
		古墳		須恵器蓋坏、円筒埴輪片	
		弥生？		サヌカイト剥片	
		縄文以前		サヌカイト剥片	

要約

今回の太井遺跡09－1調査区は、遺跡西端部分の調査で、過去に（財）大阪文化財センターにより行われた阪和自動車道部分調査（『太井遺跡』）K地区南側に位置する。西除川谷底平野部分であり、中世以降になり積極的な活動痕跡が見られるようになる。

一方の、余部日置荘遺跡09－1調査区は、遺跡西部の中期段丘面上、過去に（財）大阪文化財センターにより行われた阪和自動車道部分調査（『日置荘遺跡』）J地区南側に位置する。調査では、古代（8世紀頃）以降の中位段丘面上開発の変遷を追うことができた。遺跡内で多数確認されている轍が、今回の調査でも確認でき、西に隣接する谷地形埋没にかかわると推測される。また、この谷地形埋没と関連すると思われる、8世紀頃の用水路が確認でき、延長は上記調査J地区の溝に連続する。溝は9世紀には埋没し、隣接調査地では10世紀前後の集落も確認されているが、今回の調査地では以後しばらくの様相が不明である。その後、遺跡内では11世紀頃から遺構・遺物とも目立ち始め、13世紀の爆発的増加となる。今回の調査では、この13世紀以降の開発に伴うと思われる遺構が確認できた。以後は、連続的に耕作が行われていたと推測される。

(財)大阪府文化財センター調査報告書　第199集

堺市

太井遺跡・余部日置荘遺跡

大阪府営水道中期整備事業「バイパス送水管布設工事」に伴う発掘調査

発行年月日　：　2010年3月31日
編集・発行　：　財団法人　大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号
印刷・製本　：　株式会社　明新社
奈良市南京終町3丁目464番地